

夜叉のあしおと

—ogiso sasa—

荻 塑  
做 沙

月明かりの夜闇の中心で、少年は、ひとり空を見上げた。

遠く、手を伸ばしても届かない月は、少年を嘲笑(あざわら)うかのよう静謐(せいひつ)な光を投げかけていた。

人の振りをいくらしてみても、自分は自分ではしかないというのに、醜く足掻(あが)き続ける姿を、月は、残酷に照らし出す。

少年は、こらえきれずに顔を覆っていた。

月は、彼を慈しむように優しく見守るのに、彼は気づかない。

少年は俯き、そして、背を丸める。苦しげな呻き声と、微かな嗚咽(おえつ)が小さく洩れた。

夜の静寂に、一頻(ひとしき)り彼の苦悩の聲(こえ)は、こだました。

月は苦悩する少年を静かに見守り続ける。

やがて、蝸牛(かたつむり)のように緩(ゆる)やかな時の歩みの果てに、少年は顔を上げた。

ゆっくりと、振り仰ぐ空には冴え冴えとした月。そして、少年の顔には静かに狂気を湛(た)えた笑みが広がる。

月は青褪(あおざ)め、そして、少年は駆け出す。

闇に向って。暗いほうへ。より暗い場所へと、彼は駆け抜ける。

少年の足音が闇に消えるまで、月は彼を見守り続けていた。

少年は、それに最後まで気づくことなく、その姿が闇に呑み込まれて消えても、月は見守り続けた。

そして、

月の光の届かぬその先に、その躰(あしおと)だけが遠く響いて消えた。

生まれたばかりの赤ん坊を抱いて夜道を歩く月子は、暗い空に浮かぶ月を仰いでため息をひとつこぼす。

やっとここまで来た。

けれど、それは感慨に浸(ひた)ってられるほど穏やかな日々ではなかった。

だけど、あと少し。あと少しで何もかもが終わる。

そう思ったとき、赤ん坊の小さな手が月子の髪をぎゅっと握る。まるで月子の心が読めるのか、行かないでと言っているようにその手に力を込めてくる。

月子は、そんな赤ん坊にそっと顔をよせ、そのやわらかな頬に触れる。

「……月が……、ね、ユエ」

ユエと呼ばれた赤ん坊は、風にとぎれた月子の声に、ふいに泣き出した。闇がまた色を濃くしたように感じたのは、月が隠れたせいなのか。

月子は、それでも赤ん坊を抱きしめたまま、その顔をいとおしそうに見つめていた。

長い間共に過ごしてきた愛しい存在だった。いつまでも一緒だと約束もしたけれど。けれど、それももう終わり。

「今までそばにいてくれて、ありがとう。でも、これからは自由に生きるの。ただの人として幸せになるの」

月子の長い黒髪をきつく握るユエに、月子はそっと別れを告げていた。

赤ん坊の泣き声は夜のしじまに響きわたり、暗い彼方に吸い込まれて行く。それを月子はうるさいとも思わず、あやすようにただやさしく抱きしめた。

「少し眠ろうね。次に目が覚めたら、もう君は一人の人間だよ。普通の家族に囲まれて、平凡な毎日を過ごすの。あの二人なら、きっと君を幸せにしてくれるわ」

月子の言葉に操られるように赤ん坊は泣くのをやめ、そして次の瞬間にはもう眠りにおちていた。

月子は赤ん坊の寝顔を見おろしながら、優しい笑みを浮かべた。

そして二人は、闇の中へと静かに消えた。

残された闇の中には、再び月がそのかそけき光をのぞかせて、二人がそこに存在していたことをその記憶に確かに刻んだ。

四月も半ばを過ぎて少し遅い桜の季節も過ぎた頃、新緑の芽吹く高原の街には春の風が吹き抜けていく。高原にあるこの街は、高原野菜や、葡萄農園、その他の果樹園などが広がり、長閑な風景が広がる。背の高い大きな建物はほとんどなくて、住宅街の中に小さな商店街があり、学校や福祉施設が点在している。その四方は高い峰に囲まれて、今の季節は、まだ雪がその頂きを僅かに覆っていた。

一条和沙(いちじょうかずさ)は、入学したばかりの高校からの帰り道、自転車を気持ちよく走らせていた。明日からはゴールデンウィークの前半の連休が始まることもあって、理由もなく浮かれていた。学校が嫌いなわけではないが、長い休みというのはなぜか楽しみで、それは昔から変わらない。

高校生になったといっても、一朝一夕に大人になれるわけでもなくて、それまでの自分の延長線でしかないのだと、こういう時に思う。やってることがあまり変わらないから、それも仕方のない事なのだろうが、今は、そんな小難しいことを考えるより疾走する感じを和沙は楽しんでた。

だが、大通りから次の路地を入ればすぐに自分の家に着くという所で、それまでの爽快な気分は台無しにされた。それまでの通りと違って、私道であるその路地は車一台がやっと通れるというくらいの幅しかなく、その両側にはブロック塀が続いている。その道の真ん中に大きなファミリータイプの白いワゴン車が、こちらを向いて止まっていた。しかも丁寧に電信柱が立っているその前に、である。

徒歩ならば、ぎりぎり通り抜けられたかもしれないが、自転車だと少しきつい。車に擦って傷でも付けたりしたら、後でうるさいだろうし、無理をしてもいいことはない。

近くに運転手らしき人は見えず、しばらく車と睨めっこしていた和沙だったが、引き返して逆の入り口から入ることにした。

もう家は目の前に見えているというのに、遠回りしなければならないことに本気で腹が立つが、怒る対象がない。仕方なく自転車の向きを変え、勢いよくペダルを踏み込む和沙だったが、何故か前に進まない。何かが引っ掛かっているのかと足元を見ると同時に、背後に厭な気配を感じた。身体を振って後ろを見ると、大柄な中年の男が和沙の方に手を伸ばしてくるのが見えた。

何が起こったのか意識するよりも早く、咄嗟に身体が逃げの態勢になる。だが、男の手はそれより早く和沙を捕らえていた。

和沙は、まだ自分に何が起きているのか分かっていなかった。ただ、締め付けてくる男の力が予想外に強くて、自力で振り解けないことが怖かった。つんとすえた汗の匂いが鼻を衝き、吐き気が込み上げる。

後ろから羽交い絞めにされて、自分が引き摺られていることが分かっていても何も出来ない無力感が腹立たしかった。自分の力が通用しないのが怖くもあり、悔しい。だが、このままではもっと情けないことになりかねない。

和沙は助けを求めて声を上げようとした。だが、一瞬早く男の手が顔を覆ってきた。

口と鼻を一気に塞がれて、自分は死ぬのだろうか、ふと思う。

それは、どこか他人事のように思え、和沙はこんな時なのに笑い出したくなる。けれど、本気で息が苦しくなってくると、もう冗談では済まされなくなってきた。

目の前にはアスファルトの道路と倒れた自分の自転車が見えた。けれど、視界は徐々に狭まりつつある。視界が黄色く濁り、そして暗く染まっていく光景が和沙の意識を少しずつ飲み込んでいく。けれど、それはどこまでも現実味がなくて、和沙は危機感を覚えることなく暗闇に沈んでいた。

---

「大丈夫か？」

真っ暗な中に声がした。

「生きているんだろ」

ずいぶんなセリフに、和沙は急に現実に戻された。

唐突に意識は目覚め、そして、堰を切ったように記憶が戻ってくる。それと同時に和沙はひどく咳きこんでいた。酸欠状態だったところへ急に空気が流れこんできて、苦しい中で和沙は貪るように息をする。

地面にうつ伏せになった状態らしく、アスファルトの表面の凹凸が鮮明に視界に飛び込んできた。

「大丈夫そうだな」

また声がするけれど、和沙は顔を上げることが出来なかった。アスファルトに両手を着いて何とか身体を起こすと、自分のすぐ側に黒い革靴が見えた。意識してゆっくりと呼吸しながら、和沙はようやく顔を上げると、そこには黒い服を着た二十代半ばくらいの男がいた。その向こうには和沙を襲ったと思しき中年男が倒れているのも見えた。

状況が今ひとつ分からないが、どうやらその黒服の男が助けてくれたらしい。

和沙は、自分を襲った男をまじまじと見る。四十を過ぎたくらいの小太りの男だった。襲われた路地にまだいるということは、意識を失っていた時間はそれほど長くはなかったのだろう。けれど、近くには自分たち以外の人の気配はない。

そして、和沙は道路に座り込みながら、助けてくれたらしい黒服の男を見上げる。

はっきりした目鼻立ちの、精悍な雰囲気を持つ男だった。俳優のように整いすぎた顔はつくり物めいているのに、その表情はとても人間くさい。

そして、この事態をどこか楽しんででもいるように、その目は笑っていた。

助けてもらった礼を言おうとして口を開きかけた和沙だったが、途中で言葉は霧散する。

黒服の男の向こうに倒れていた中年男がゆらりと立ち上がった。

その動きは不自然で、何かに操られているみたいに見えた。

男と目が合い、和沙は気圧されるのを感じた。

憎悪の目というのはこういうものなのか。異様な眼で睨まれて、和沙はその目に射竦められたように身動き出来なくなる。そちらの方には背を向けていた黒服の男は和沙の表情からそれを察したのか、ふりむきもせず急いで和沙の腕を取る。

中年男は、その見た目からは想像も出来ないほど身軽にひらりと身を翻して、止めてあったワゴン車に滑り込む。何かに操られているかのようなその動きはどこか不自然で、不気味だった。それと同時に、黒服の男は和沙を引き寄せて強引に立たせると、有無を言わずに抱き上げる。

呆気にとられる和沙が抗議しかけた時、車のエンジン音が耳に入る。道の両側は背丈ほどもある塀が続いている。逃げ場はどこにもなかった。自棄になった中年男は黒服の男もろとも和沙を殺そうとでもいうのか。ハンドルを握るその男の目には紛れもない殺意がにじんでいた。

殺される。

和沙は思わず目を閉じていた。

耳を聳するエンジン音が近付いて来る。そして、つづげざまにガシャンと何かがぶつかる音がした。

その音に和沙は、一瞬身を強ばらせたが、予想した痛みや衝撃は何もない。

恐る恐る目を開けると視界が妙だった。やけに見通しがいい。なぜだか知らないが、自分は塀の上にいるらしかった。

全てが目まぐるしく動き、和沙はその展開に付いていけなかった。

疑問は多々あったが、何から口にすればいいのかさえ分からない。

車で逃げた男は何者なのか。

何故、和沙を襲ったのか。

それに、助けてくれた男にも疑問はある。

そこまで考えて和沙は、はっとして上を見る。

黒服の男の顔が近くに見えた。近過ぎるくらいに。

男は、和沙を見下ろしていた。目が合って、微笑まれ、和沙は思わず赤面していた。

自分が軽々と子供のように抱っこされている事実も恥ずかしかったが、それ以上に男の顔が近くにあることが動揺を誘う。

降りしてくださいと、やっとの思いで声を振り絞ると、黒服の男は無言で、塀からひらりと音も立てずに飛び降りる。男の手から解放されて自分の足で地面に立つと、和沙は、ようやくまともに物が考えられるようになってくる。そして、道路の脇に潰れた自分の自転車を見つけた。

さっきの凄いな音は自転車が轢かれた音だったのかと納得すると同時に、高校の入学祝に買ってもらったばかりなのに

、もう壊れてしまったと言ったら……。母の怒った顔が目浮かび、和沙は憂鬱になる。

「もう、一人で大丈夫だな」

傍らから声がして、和沙はその男にまだ礼も言っていなかったことに気がつく。

何はともあれ自分は怪我もせずに助かったのだ。それはこの黒服の男の人のおかげだった。

「ありがと……」

と言いかけて、和沙は目をしばたく。

さっきまでいたはずの男の姿がない。

悪い夢でも見ていたのだろうか。狭い路地だったが見通しはいい。どこかの家に入ったのか。だが、この近所の人は皆知っている人ばかりで、あの男には見覚えはない。

それでは一体どこに消えてしまったのか。

それとも本当に夢でも見ていたというのか。

だが、和沙の目の前には現実が落ちていた。

「これ、何て言おう」

フレームが曲がり、タイヤが変形してしまった自転車を前にして、和沙は途方に暮れるしかなかった。

## # 2

休み明け、和沙は徒歩で学校に向っていた。

いつもなら自転車で、十分ほどあれば着くのに、歩きではその倍はかかる。いつもより早起きをするのも、連休の間の登校日ということもあって更につらい。

本当についてない。

半ばふてくされ気味の和沙に、途中で合流した斎藤優介（さいとうゆうすけ）が心配顔で様子を窺う。

「今日は自転車じゃないんだ。何かあった？」

優介は中学の時に転校してきて以来の友人で、最初から気になる存在だった。大人しそうな印象を他人に与えるせいで色々と踏み躪られて来たらしく、イジメが原因での転校だった。そして、また同じようにイジメに遭った時に、和沙が彼を庇ったのが親しくなったきっかけだった。

和沙も容姿のことではかなり理不尽な目に遭ってきている。親と似ていないことを揶揄されたこともあった。そんな過去を持つ和沙には優介のことは他人事と思えなかった。

長い前髪で顔を隠し、更に眼鏡までしている優介は、根暗な感じがしてクラスに馴染むことはなかったが、正反対の和沙と一緒にいることで少しずつ容認されていった。だからという理由ではないが、優介は和沙のことを裏切ることはない。始終べったりと一緒にいるというわけでもなかったが、大抵は二人セットで扱われることが多かった。

「車に轢かれた」

何の前置きもなくぼそりと呟いた和沙に、優介の足が止まる。

「怪我は、してないよな」

いつも通りの元気な和沙に、優介が問い返す。

「入学祝に買ってもらったばっかだから、しばらくは新しいヤツ買ってもらえそうにないんだよな」

まったくもってついてないよな。と和沙は冗談めかして笑っていたが、交通事故に遭ったのなら、そんな冗談を言っている場合ではないだろう。

優介は事の真相が全く分からず、和沙に訴えるような目を向ける。

「轢かれたのは自転車だけだったから、オレは大丈夫なんだけど。なんか、奇妙なことに巻き込まれたような気がするんだよな」

再び歩き出し、和沙は数日前の事を優介に話して聞かせた。自分でも理由が分からない分、あまり上手い説明は出来なかったが、それでも優介は、要点は理解してくれたらしい。

「中年男に誘拐って、何か、だな」

何が、だな、なのかは分からないが、優介が言わんとするところは何となく分かる。和沙も、自分でも一瞬考えて、怖くなってすぐに打ち消した想像ではあった。

「和沙は、結構美少年だから。...モテモテだな」

その間が微妙で、思わず叫び出したくなる。

「でも、それで終わりってことがあるだろうか。犯人は捕まっていないし、それ以前に警察とかにも言ってないんだろ」

「親にだって言ってないよ」

言えるわけがないだろうと、和沙は続けた。

そんなことをしたら事がどんどん大きくなって、自分のカッコ悪いところが世間に知れ渡る。男に襲われたなんて、絶対に他人には言えない。それに、両親には心配をかけたくなかった。

「じゃあ、自転車が壊れた理由はどうしたんだ」

「買い物の途中で道端に止めてて、戻ったら壊れてたことにした」

そのことで自分の不注意をいくら責められても、和沙はそれで押し通したのだ。そのせいで新しい自転車はおあずけになってしまったのだが、そればかりはゆずれなかった。

和沙は養子で、赤ん坊の時に今の両親の元に引取られた。詳しい事情は知らないけれど、和沙の本当の母親に育ててくれと頼まれたのだと言っていた。そのことで家族の仲がギクシャクすることはなかったけれど、大人になるにつれて少し微妙になってきているのかもしれない。でも、たとえ本当の親子だったとしても、やっぱり本当のことを言わない

だろうなと和沙は思う。

余計な心配はかけたくないし、とにかく自分は無傷だったのだ。

「それで納得したの？」

「納得してなくても、それで押し通すから、何か聞かれても知らないって言っというて」

優介は何度か和沙の家に泊まったりして、和沙の両親とも面識がある。虐められて悩んでいたのを打ち明けたこともあって、和沙の父には色々世話にもなったこともあり、和沙が何を心配しているのかは大体想像がつく。

「でも、運よくその黒服の人が来てくれて良かったな」

「それって偶然だと思うか」

「偶然でないのなら、何」

「さあ」

学校が近付き、並木道に入ると学校へ向う途中の生徒たちが大勢歩いていた。二人は何となく、それ以上話を続ける気になれなくて黙り込む。

優介は和沙に聞きたいことがまだあったが、和沙も事態がよく分かっていないらしいし、そのまま話し続けても何の結論も出ないことが分かるだけに、何を言ったらいいのか分からない。

「おっはよう」

背後から勢い良く声を掛けられて、和沙と優介は顔を見合わせて、そして、振り向く。

朝から満面の笑みで朗らかに挨拶をするのは、高校に入ってからいつの間にか親しくなった藤居紗雪（ふじいさゆき）という女子だった。彼女は二人の間に割り込むように駆け寄って来て、そして、そのまま歩き出す。

「今日は自転車じゃないんだ。めずらしい」

「壊れたらしいよ」

紗雪は、和沙の方に問いかけたのだが、応えたのは優介の方だった。話しかけられた本人は、何度も説明するのが面倒なのか、それとも赤の他人には話したくないということなのか、それに触れられたくない素振りを見せる。何故かは知らないが、和沙は紗雪のことが苦手らしかった。そんな和沙をかばうように優介は紗雪との緩衝材の役目をいつの間にか担っていた。

「そうなんだ」

紗雪は、そんな和沙の態度に傷つく様子もなく果敢に話しかけている。

彼女が和沙目当てに近付いたのは最初から疑いようもなかった。別に優介は、それでも構わないと思うのだが、和沙は言い寄ってくる女子に対していつも距離を置く。十代の男子なら彼女が欲しいと思うのは普通なのに、和沙は違っていた。女嫌いというわけでもなさそうなのだが、優介も和沙のことを全て理解しているわけではない。

「連休中の登校って、なんかだるいよね」

紗雪は、和沙が返事をしなくても勝手に話を進めていく。紗雪がそこにいることで気まずい思いをしたことがないのは、気転の利く子だからなのだろう。和沙の方も、もう少し優しくしてやっても良さそうなものだが、こればかりは優介にもどうしようもない。

「後半の四連休って、何か予定とかある？」

「べつに」

「じゃあさ、映画でも見に行かない」

「あまり興味ないから」

二人のやりとりを聞きながら、優介はいつの間にか紗雪を応援していた。

和沙は半端じゃなくもてるし、今まで何人もの女子が告白しては玉砕していったけれど、紗雪は打たれ強いのか、少々のことでは諦めない。それが応援したくなる理由の一つでもあったが、ふわふわした印象の可愛い女の子で、守ってあげたくなるタイプだからでもあった。

並木道はそれほど長くはなく、あっという間に学校に着いてしまう。クラスの違う紗雪にとって朝のこの時間は、和沙と話せる貴重なチャンスだった。ぎりぎりまで和沙の隣で粘り、そして、教室の前まで来てやっと諦める。

「女の子って、分かんないな」

やっと解放されて和沙がそう呟くが、優介に言わせれば和沙の方がずっと謎だった。



放課後。金網のフェンスの向こう。グラウンドを走る和沙を見つめる紗雪は、一向に縮まらない距離に苛立っていた。和沙を遠巻きにする女子は多く、彼はどこにいても人に囲まれていた。

「ライバルが多くて大変ね」

紗雪に付き合わされて隣に立つ親友の瞳が、周囲を見て茶化すようにつぶやいた。

「別にいいよ、あの人たちは。騒ぐだけで何もしないから」

それよりも気になる存在は、いつも彼の隣にいる斎藤優介の方だった。

「二人で何か話してるのに、私が近付くといつも黙り込むのよね」

これでも努力はしているのだ。逃げられてもめげずに毎日声をかけていたし、毎朝の挨拶も欠かしたことは無い。それなのに、和沙はいつも一緒にいる優介を盾にして、あまり口も利いてくれない。

嫌われているのかもしれないと思ったこともある。けれど、優介は、戸惑っているだけじゃないかと言う。今まで、紗雪のように真っ直ぐに向ってくる女の子なんていなかったから、どう対処したらいいのか分からないんじゃないかも言っていた。

けれど、自分がライバル視している相手に慰められても、複雑な気分だった。

「鏡の中の男の子に似ていたからって、少し考えすぎなんじゃない？」

「でも、全然関係無いなんて思えないじゃない」

「一条君のこと、本気なの？」

「まさか。ただ興味があるだけ。なんで彼と同じ顔の人があの鏡に映ったのか、何か理由があるのなら知りたいじゃない」

「本当にそれだけ？」

「それに、彼氏だったら自慢出来ると思わない？」

「そんなに嫉妬されるのって楽しい？」

「みんなが欲しがるものを一番に手に入れるのって、快感なのよね。あの優越感は癖になるのよ。周りのみんなは指をくわえて見ていることしかできないのに、あたしはそれを持つてるのよって。あなたたちとは違うのよって、見せつけてやるの」

「私は、それが本心じゃないのは分かってるからいいけど。あんまり過激なことは言わない方がいいよ」

瞳は周囲を気にするが、紗雪はわざと反感を買うようなことを言う。

「でも、他人を羨むより、羨望の眼差しで見られるほうがずっといいわ。嫉妬する側の人間は醜いけれど、逆の立場ならそんなものとは無縁でいられるもの」

それに、相手が和沙の親友では嫉妬のしようもない。今のところ特定の彼女はいないということで我慢しなくちゃ。知り合ってまだ一ヶ月。チャンスはまだあるはず。

きらきらとした太陽の光を集める和沙が視界の中で鮮やかに笑う。

紗雪は、指でピストルをつくと和沙に狙いを定める。

紗雪のことは見ない和沙。

けれど、紗雪は、それでも彼から目が離せない。

いつか、その視線を自分に向けさせてみせる。そう心に念じて紗雪は、見えない弾を和沙に向かって秘かに放った。

学校から家に帰った和沙は、玄関にある父のものではない男ものの靴をいぶかしく見る。こんな時間に来客なんて珍しいなと思いながら靴を脱ぐ。

「ただいま」

いつものように声をかけて二階の自分の部屋に行こうと階段を昇りかけた所で、母に呼び止められる。

「和くん、お客さんよ」

自分に客？ 和沙は不審に思いながらも荷物を階段の昇り口に置くと居間へ行く。

玄関から入ってすぐのその部屋は、ソファとローテーブルが置かれた一般的なりビングとなっていて、その安っぽいソファに一人の男性が腰を下ろしている。男の前には紅茶が出されていたが、もう冷めてしまっているようだった。

和沙の帰りを待っていたというのは嘘ではなさそうだったが、和沙には心当たりがない。そして、客の正面に回って和沙は驚いた。

「この前は、済まなかったね。あの時は急いでいたから、とても助かった」

男がいきなり話し出して、和沙はわけが分からず無言で立ち尽くす。

「新しい自転車は明日にでも届けさせるから、本当に済まなかった」

「自転車を壊してしまったことをお詫びに見えたのよ」

母が、新しいお茶を用意して居間へ入りながら、呆然とする和沙をたしなめる。

「和くんったら、何も言わないから」

高校生になった今でもずっと自分のことを和くんと呼ぶ母は、顔は笑っていたが目は怒っていた。後でたつぷりと怒られる覚悟をしておいた方が良さそうだった。だが、そう言われても、和沙にも何が何だか分からない。

目の前にいるのは、あの時の黒服の男だった。お礼も言わないうちにどこかへ消えてしまったし、どこの誰なのか探しようもなかった。だから会いに来てくれて助かったけれど、どうしてこの人が自転車を壊したことになるのかが分からない。

「立ってないで座ったら」

母にうながされて和沙は男の対面に座る。それを見届けて母は、夕飯の支度があるからとキッチンへ戻ってしまった。

和沙が帰って来るまでの間に事情は聞いたのだろうか。和沙は釈然としないまま男を見た。

「あの、どうしてこんな嘘を吐くんですか」

母に聞こえないように小声で和沙は尋ねていた。

「自転車がないと困ると思ってね。それに、半分はこちらの責任だし」

「あの男と知り合いなんですか」

和沙は自分を襲った男が、あのまま逃げたことをずっと気にしていた。誰にも言えないまま、あの男にまた襲われたら無事でいられる気がしなかった。けれど、和沙には襲われる心当たりはなかったし、それをうまく説明も出来ない。それに、この男のこともどこまで信じていいものか分からなかった。

あのタイミングで都合良く助けに入るといえるのは、どう考えても偶然とは思えなかった。信用させる為に助けておいて、親しくなったところで目的を果たす、というのはよくある話だが、何が真実なのかまったく分からない状態で目の前の男は余りにも怪しすぎた。だが警戒を解かない和沙に、男は意外にもあっさりとする。

「名前や住所は知らないが、何故、君を襲うのかは知っている。本来なら、あそこで取り逃がす予定ではなかったんだが、少ししくじった」

整い過ぎた顔立ちに、一瞬、人間くさい表情がさっと掠める。あの時も思ったのだが、この人のその表情は人を安心させる効果があるようだった。

「あなたは一体何者なんですか」

「君の母親に名刺は渡したが、君にもあげよう」

男はジャケットの内ポケットから名刺を一枚取り出して和沙の方へ滑らせる。

テーブルの上を音もなく滑り、和沙の前にそれはぴたりと止まる。ご丁寧に和沙の方に向きを変えて。そこにはフリーライターという肩書きと、如月晟という名があった。きさらぎまでは分かったが下の名前までは読めない。

「今日のところはもう帰らなくてはならないが、詳しく話が聞きたいのなら、裏にある住所を訪ねてくればいい」

和沙は名刺を手に取り、裏返して見る。手書きの文字で書き込まれているのは市内の住所で、学校からそう遠くはない。

和沙が名刺に気を取られている隙に如月は席を立っていた。気が付いた時には玄関で母と如月が話している声が聞こえた。和沙は、はっとして玄関へ行く。だが、すでに如月の姿はそこになかった。

和沙は慌てて外へ駆け出していた。右を見て、左を見る。だが、如月の姿はどこにもない。肩透かしをくらったみたいに、急に力が抜けていく。

「消えるの早過ぎだろ」

和沙は夕暮れに染まる空に小さく舌打ちする。

追いかけて、捕まえて、何を話せばいいのかなんて何も考えてはいなかった。ただ、何かしなければいけないような衝動に駆られて、足が勝手に動いただけのことだ。

如月の住所は分かっている。いつでも会いに行ける。そう思うとこれ以上追いかける気も失せていた。

どうしてあんな嘘をつくのか、その理由は知りたかったが、もしもそれを聞いてしまったら、もう元には戻れないような気がして足がすくむ。

これは偶然なのか、必然なのか。

どこまでが計算されていることなのだろう。

和沙はあの謎の男に操られているような居心地の悪さを感じながら、手の中の名刺を握り締めていた。

## # 2

---

如月が訪ねて来てから何事もなく時は過ぎ、新緑も落ち着きその色彩を深く変え、降り注ぐ陽射しも夏の気配を漂わせる日が続く。

サッカー部の練習中、和沙は考え事をしながらボールを器用に操っていた。周囲の呼びかけに気が付かず、向かってくる先輩のタックルさえも無意識にかわす。

和沙が考えていたのは、如月のことだった。

得体の知れない気持ち悪さはあれからずっと続いていた。そして、それ以上に、何も起らないことが不気味だった。

あの時の男の憎悪に満ちた眼は、すぐにでも襲撃してきそうな感じがしたのに、何も起らないことで、これまでのことが全部夢だったみたいに思えてきて、厭なことを忘れようとする自分が情けなく思えてくる。

どうして自分がその標的にされなければならないのか。その理由はきっと如月が知っているはずだった。だけど、どうしても如月に会いに行く決心がつかなかった。

「……コノヤロウツ」

という先輩の野太い声と共にげんこつが降ってきて、やっと和沙は現実に戻る。目の前には、上の空の和沙からボールを奪えず、頭に血を昇らせた先輩の激怒した顔があった。

アレ？っという、きょとんとした顔をした和沙に、いつまでもねぼけてるんじゃないぞと先輩の叱責の声が飛び、和沙は慌てる。

「ゲームするぞ。お前はあっち」

そう言われて、向こうを見ると紅白戦のチームに分かれた他の部員たちが笑いながら和沙を手招きしていた。和沙はリフティングしていたボールをぼんと高く蹴り上げると、先輩にパスを出し、その隙に走り出す。

「すみませんでしたあ」

間延びした返事を聞きながら、サッカー部のキャプテンの小暮は苦笑する。彼は、和沙のその屈託の無い態度が嫌いではなかった。他の奴が和沙と同じことをしたら、二度と自分の前に立てなくなるくらい脅していただろう。だが、和沙は、サッカーの技術もそうだが、どこか浮世離れしたところがあって、あれはあれでいいような気になってくるのだから不思議だった。

そして、身軽く自分のポジションにつく和沙を見ながら、自分も駆け出していた。

放課後になると校庭を見下ろせるこの席に来るのが紗雪の日課になっていた。

乾いた砂塵の舞うグラウンドには幾人もの姿があったが、その中から目当ての人物を探し出すのに苦労はしない。

いまだき茶髪はめずらしくはないけれど、全体的に色素の薄い和沙は、周囲から浮き上がって見えた。

それは紗雪の欲目のせいばかりではなく、実際に和沙は目立つ少年だった。そして、そんな彼を眺めるのに丁度いいこの場所は、彼の親友である斎藤優介の席でもあった。

春休みに、祖母の家の蔵で見つけた鏡の中に見えたのと同じ顔をした和沙に、興味を持ったのは好奇心からだ。だが、今は微妙に違ってきている。

和沙は紗雪に見向きもしない。そんなことは今までなかった。自分で言うのもなんだけれど紗雪は結構可愛いのだ。自分から告白して振られたことは一度もない。それなのに、和沙には告白はおろか友人の座すら覚束ない。それでもめげずに声を掛け続け、少しでも近付こうと努力はしていた。

和沙には迷惑な話なのだろうが、何もしないで他人を羨んでいるよりは、思った通りに動いている方がずっとスッカリする。

そういうわけで、紗雪は今日も懲りずにこうしてこのクラスに足を運んでいた。

自分の席に座り本を開く優介の机を挟んで、その前の席に向かい合わせに座る紗雪の胸中を知らぬ顔で、優介はその繊細な指でページをめくる。その音が規則正しく響くのが少し癪に障るが、それが優介なりの優しさなのだとも思う。

自分がふり向かせたいのは和沙のほうなのに、紗雪がいつも一緒にいるのは彼の友人の優介の方だった。

そして、和沙と話す回数よりも優介と話す回数ばかりが増えていく。

三人でいても、初めは確かに和沙に話しかけていたのに、いつの間か受け答えをしているのは優介にすり替わっている。そんなことばかりだ。

優介とは和沙を挟んでの友人ということになるのだろうが、紗雪はこの奇妙な関係に慰められている自分を悲しく思う。

「何でこんなに執着するんだろう」

「好きだから、じゃないか？」

いきなり優介が呟いて、紗雪は我に返る。そして、無意識に思っていたことを口にしてしまったことに気付く。聞かれてまずいことではなかったけれど、少しばつが悪い。

優介はそんな紗雪の気まずさを気にした様子もなく、開いた文庫本から顔を上げようともしない。

窓の外ではサッカー一部の練習が続いていた。今は試合形式の練習なのか二つのグループに分かれて一つのボールを追っていた。

放課後の誰もいない教室で、窓の外に興味を示すわけでもなく、ずっと読書に没頭する優介が何を考えているのか、紗雪には謎だった。

無表情とは言わないが、感情表現が控えめすぎて、その真意がどこにあるのか掴めない。和沙と一緒にいる時にはそんな気配は微塵もないのに、こうして二人きりでいると息が詰まるときがある。

「確かに一条君のことは好きだけど、レンアイっていうのとは少し違うような気もするし」

「簡単に手に入らないからムキになっているとか？」

「それはあるかもね。私って我儘だし、欲しいと思ったものは絶対手に入れてきたし」

自分が我儘だと素直に認める謙虚さに紗雪は我ながら可愛いと思う。それは謙虚とは言わないと瞳なら言いそうだが、優介は文字ばかりの本から顔を上げて軽く笑む。

「黙って待っているだけじゃ、和沙は一生気が付かないだろうな」

和沙から人の顔を覚えられないのだと、優介は以前に聞いたことがある。それは、優介だけに教えてくれた秘密だった。普段はうまくごまかしているらしいけれど、そんな日常が簡単だとは思えなかった。それを彼女に教えるつもりはなかったが、何も言わないでいられるほど優介は冷たい人間でもない。

「自分の都合のいいように想像してそれに浸っているだけじゃ、誰も振り向いてはくれないからね」

「実感がこもってるけど？」

紗雪は、和沙と優介がどんな風に知り合ったのか聞いてみたい気がしたが、優介はさらりとかわす。

「藤居さんのやり方は正しいと思うよ」

「ありがと。そう言って貰えると失いかけた自信も取り戻せそうだわ」

今まで挫折らしいものを味わったことのない紗雪には、和沙は初めての壁だった。勿論、それを周囲に悟らせるようなへまはしていないけれど、そういうことを分かってくれる人がいるのも悪くはない。

「でも、難しいと思うよ」

「一条君て、どういう人が好みなの？」

知らない、即答されるものとばかり思っていたのに、優介はそこで沈黙する。

「何かまずいことでも言った？」

「いや、ごめん。和沙の好みは知らないけれど、和沙を好きだという人は多いんだよな。なんでかなって思って」

「面白そう、だからじゃない？」

「面白そう？」

「そう。一条君の側にいると何か楽しいことがありそうで。なんでもないことでも一緒に何かやれたらいいなあって思う。同じ目線で同じ思い出が作れたらサイコーでしょ」

正直言って紗雪にはレンアイというものがよく分からない。今まで何人かの男子と付き合ってはみたけれど、それは恋とは違うような気がした。

誰かに興味を持つのは恋の始まりなのかもしれないが、本当にそれが恋なのか、紗雪にはわからない。

一緒に遊びたい相手が異性だと恋になるのか。はっきりと区切ることの出来ないものをどうすればいいのか、今の紗雪にはその区別がつかない。

「人の好き嫌いなんてその程度のことなのかもしれないな。一緒にいて楽しいかどうか、それだけのことなのに何か意味がないと不安だから、友達だとか、恋人だとか、いろんなレッテルを貼って分類して、それでようやく安心できるのかもしれない」

「そっか。そうだよな」

今はまだ特別な誰かが見つからないだけ。恰好ばかり気にして誰かと恋人の振りして、精一杯大人の顔を装っているちぐはぐな自分がそこにいる。

「私、誰かのことをここまで考えるのって初めてかも。好きも嫌いも自分が決めるものだと思っていたし、自分さえ良ければそれでいいみたいなのところもあったし」

自分以外の誰かのことばかり考え、その人の気を惹くために必死になるのも悪くない。

そう思えるのは和沙が特別だからなのか、自分が大人になったからなのか。

優介は和沙のことをどう思っているのだろう。また読書に戻ってしまった優介を見ながら、紗雪はふと思う。

まっすぐな黒髪は少し長めで顔の大半を隠してしまっているけれど、その素顔はけっこう繊細で美形だった。和沙と並んで歩いていると光と影のようにも見えなくはない。

つまりは、お似合いの二人だということで、どちらにしても紗雪には面白くない話ではあった。

学校の帰り道、すっかり日も暮れた暗い夜道を、和沙はひとり家路を辿っていた。サッカー一部の練習は想像していたよりもきつく、疲れた身体でとぼとぼと歩く和沙は、はやく自転車が届かないかなと切実に思う。あれから一週間になるのに、如月から何も連絡がない。本当に自転車を弁償する気があるのかどうか。親には自分のせいだと言った如月だが、実際は違うことを和沙は知っているため何も言えない。

自転車は欲しいけれど、如月には会いたくない。それが今の和沙の正直な気持ちだった。

夕闇は本格的に闇に染まり、月が昇る。まだ冷たさの残る風が首筋を撫でて、和沙は思わず身を竦ませた。

早く家に帰ろう。

和沙が歩き出した時、ふいに背後から足音が聞こえた。

まるで和沙が動き出すのを待っていたかのように感じたのは、和沙の自意識過剰だろうか。

けれど、変な男に襲われたのはつい最近のことだった。気にするなと言う方が無理だろう。

自然と和沙の歩みは早くなる。辺りには人家はなく、街灯もまばらだった。しばらくは一本道がつづくこの道は、いつもなら他に下校する生徒がいるのに、なぜか今日は和沙以外に通る人はない。

背後からの足音は、どうしてこんなにも不気味に響くのだろう。うしろを確かめたくなるが、足を止めるのはいやだった。

あと少しで大通りに入る。明るい光が近づくのを見て、ほっとしたその時、いきなり肩をたたかれた。

だれかが近づいた気配はなく、突然のことに和沙は飛び上がるほど驚いた。

「待て」

そういわれて素直に待てるはずもなく、和沙はその手をふり払って走り出していた。

けれど、大通りにでる手前で人影を見つけ、思わず目を疑う。

離れたところからでも、見分けられるほど親しい人ではないのに、和沙はそれが、如月だとわかってしまった。

なんでこんなところにいるのだろう。ていうか、さっきのは、もしかして如月だったのだろうか。いや、違う。背後にいた人が先回りしてそこにいるのは不自然だ。

でも……、如月なら可能なのかもしれない。

和沙は、混乱していた。まともに頭が働かないというのは、生まれて初めてのこともかもしれないと思う。

「そんなに慌てて逃げなくてもいいだろう。少し話がしたいだけだというのに」

如月のその言葉に、和沙はやっぱりと納得してしまった。

「お前に話しておかねばならないことがある」

そう言われて、聞きたいことがあるのはこっちのほうだ、と和沙は思ったが、いざ如月を目の前にすると、何も言えなかった。

「今夜は時間があるだろう」

確かに、如月の言うとおりに、今夜は両親ともにいない。けれど、どうして如月がそれを知っているのか。両親が留守にすることなんて誰にも言っていないのに……。

---

国道沿いの道を二人で並んで歩きながら、和沙はこの成り行きをどう考えればいいのかわからなかった。如月とはもう一度会うことになるとは思っていたけれど、この展開は予想もしていなかった。

和沙は、如月にうながされて、自分の意志とは関係なく、何かに操られるように歩きはじめていた。このままついて行ったらダメだという感じはした。けれど、このまま如月から逃げていても仕方がないと、心のどこかであきらめてもいた。

如月が暮らす1LDKの部屋の中は結構広くて、がらんとしていた。比較的新しい建物で、ごく普通の二階建ての賃貸住宅である。アパートの南側には駐車場があり、建物の北側に玄関が並んでいた。部屋数は全部で八つ。そのうちの二階西側の角部屋が如月の住居らしかった。玄関に表札はない。

そして、その言葉通り、本当に何もなし。カーテンもなく、家具など一つもない。照明器具はかろうじてあったが、

多分、部屋にそのままあったものだろう。本当にこの部屋に住んでいるのか、和沙は何度目かの不安を胸に抱く。

和沙が通されたのは畳の部屋だった。やっぱり、ここにも何も無い。引越しの荷物はおろか、ダンボールや、旅行鞆の類も、だ。

「本当にここに住んでるんですか？」

和沙は、居心地の悪さに周囲をきょろきょろと見回しながら、如月に問いかける。

「いや」

如月は、ごく普通にそう応えた。

「それじゃあ、ここって何なんですか」

和沙は、如月という人が何を考えているのか益々分からなくなる。

「一応の拠点、かな」

「拠点って何のですか」

「この街での活動の」

フリーライターの仕事の為とも取れる言い方だったが、その真意がわからない。

「とりあえず、飲み物でもどうだ。今、買ったばかりだからまだ冷えている」

そういえば、この部屋には冷蔵庫も見当たらない。

如月から渡されたコンビニの袋の中を見てみると、数種類のペットボトルが五、六本入っていた。

「あの、襲ってきた男って何者なんですか」

自分が襲われる理由に心当たりのない和沙は、それが気持ち悪くて仕方がなかった。たいした理由も無しに奇妙な行動を起こす人はいるけれど、あの男の場合は違うような気がした。それに、如月があそこに居合わせたのが偶然でないなら、何か知っていてもおかしくはないはずだ。

如月は、和沙の問いに少し考えてから口を開いた。

「人によってその呼び名は違うが、俺は鬼と呼んでいる」

いきなりそう言われて和沙は戸惑った。簡素過ぎる如月の言葉に、はたして自分がそれを理解できるのか。そう思うと途端に自信が無くなっていくのを感じる。

鬼と言われても抽象的過ぎて今一つ分からない。

鬼と言われて咄嗟に思い浮かぶのは、昔話に出てくる赤鬼とか青鬼くらいだった。それも桃太郎とかに出てくる、節分のお面みたいな奴だ。

けれど、和沙を襲った男は人間に見えた。それは、どう解釈すればいいのか。

「あれは人間に見えましたけど、鬼って人と変わらないものなんですか」

「アレは、鬼に取り憑かれた人間だ。鬼とは肉体を持たない意思のようなものだ。悪意を持った意識の塊のようなもの。肉体を持たない自我とでもいえば分かり易いか。実体を持たぬ故にどこまでも浅ましく貪欲な自我だとも言える。そして、鬼は自由に動くことの出来る身体を欲する。だが、鬼を宿すことの出来る肉体を持つ者は存外に少ない。大抵は鬼の負荷に肉体の方が耐え切れずにすぐに駄目になってしまう。鬼に取り憑かれた人間は死に、器を失くした鬼は新たな器を求めてこの世を彷徨う」

如月は淡々と言葉を続け、和沙は混乱したままその言葉を聴き続けるしかなかった。

質問したくても、どこがわからないのかすらわからないのだから……。

如月の言葉は普通に聞いていたら荒唐無稽な絵空事でしかなかった。

それなのに、どうして自分はそれを否定出来ないのだろうと、和沙は自分に疑問をもつ始末だった。

何かがおかしいのはわかるのに、どこがおかしいのかははっきりしないせいで何も反論出来ず、肯くことしか出来ない自分が悔しかった。違うと言い切れないから何も言えないのか、狂っているなりに筋が通っているから肯きそうになるのか。

和沙の中には釈然としないものばかりが降り積もっていく。

「それじゃあ、オレだけが襲われてるっていうわけでもないんだ」

なかば自棄になりながら和沙はそう言ったのだが、如月はさらに和沙を混乱させるようなことをいう。

「否、アレは、お前を狙っていた」

「なんで、オレ？」



自分は鬼に気に入られたということなのだろうか。

「お前は特別だから」

「特別って、なんで」

厭な予感にはしていたが、和沙は、少しも嬉しくない如月の言葉に、聞かなければよかったと後悔する。

「鬼たちは常に不死の身体を求めてこの世を彷徨っている。決して朽ちることのない完全なる器と、その万能の力を手に入れるのがその目的だ」

「それでなんでオレ？」

和沙には如月が何を言いたいのか、さっぱりわからなかった。

不老不死なんてことを言われてもわけが分からないし、幽霊みたいな実体の無いものが存在すると言われても、冗談にしか聞こえなかった。これまで生きてきて一度も幽霊なんて見たこともないのだ。そんな人間が特別なわけがない。

「信じる信じないはお前の自由だ」

如月は、別にどう思われようが関係ないという風に素っ気なく言う。

現実にそんなものが存在するなんて誰も思いはしないだろう。

それなのに、どうして如月はそんなことを言うのか。

「そんな話、すぐに信じられる方がおかしいです」

ここに来た時よりも疑問が増えているようで和沙はげんなりしてきた。

こんな話が聞いたかったのではないのに、今更なかったことにもできやしない。

「事実を言ったまでだ。信じたくないのならそれで別に構わないが、それでまた襲われた時に、お前は どうやって自分の身を守るつもりだ」

「だって、そんなの、どうしようもないじゃないですか」

鬼だとかいう得体の知れないものを相手に身を守る術など一介の高校生に分かるはずもない。というより、誰だって知らないだろう。

全く要領を得ない如月の説明に、和沙はからかわれているのだとしか思えなかった。

「だが、現実にお前は鬼に襲われている」

そう言われて、和沙は返す言葉を見つけられなかった。

「まあ、記憶が消されているのだから当然か」

またもや妙なことを言い出す如月に、和沙は来るんじゃないかと何度目かの後悔をしていた。

「お前の両親が本当の親ではないことは知っているな」

混乱している和沙に、如月は少し表情を和らげてぼつりと呟いた。

確かに、自分は今の父と母の実子ではないけれど、どうしてそんなことをこの人が知っているのかが分からない。そして、和沙は、そのまま如月を見つめる。

「俺は、和沙を迎えに来たんだ。もとの世界に連れ戻すために」

一連れ戻す？

「お前は記憶を消されて、ある人に困って彼らに託された。このまま何事もなければ一条和沙としてずっとここで暮らすのも良かったのだが、そうも言っていられなくなってきた」

和沙は如月の言葉を全く理解出来なかった。

もとの世界とは何なのか。

それでは自分は一体何なのか。

いきなり迎えに来たと言われてもどうしていいのかわからない。誰か別の人間と間違えていると考えるのが普通だろう。

だが、戸惑う和沙を見て、如月は穏やかに笑う。

「安心しろ。俺はお前の願いを叶えるために来たのだから」

その如月の言葉には、安心や信頼を寄せるには禍々しい響きが混ざっていて、和沙はどこにも逃げ場を失くしてしまったような心細さを感じていた。

自分は如月に何も願ってなどいない。それなのに、どうしてそれを即座に否定できないのだろうか。

如月の話を全て嘘だと決め付けるのは簡単だったが、それで、自分はこの先全部を否定して、この前みたいな事があ

った時に何ができるのか。

何も出来ないまま翻弄されるのか。

一否、それはもっと厭だ。

鬼に狙われるのも、如月に関わるのも、何もかもが胡乱で胡散臭い。

そしてそれ以上に、自分はここの住人ではないのだと言われるのは、いきなり境界線を引かれ、世界が分かれたように思えて寂しかった。

お前は異端なのだと、そう突きつけられた気がした。

髪の色が違うと言って仲間はずれにされた時のことを思い出す。その時は寂しいとは思ったけれどあまり深く考えなかった。だが、今は、少し傷ついている自分がある。

「彼らは何も知らない。ただ、彼女との約束で和沙を育てているだけだ」

「彼女って、誰？」

「お前の生みの親だ」

そういえば生みの親のことなんて、今まで深く考えたことがなかったと和沙は振り返る。養子なのだと聞かされても、その後の両親は何も変わらず、和沙はそこで十分に幸せだった。自分の本当の親が誰であれ、やはり自分にとっての親とは今の両親になる。だから、今まで気にもならなかったのに、自分が他人と違うのだと言われると急に不安になってくる。

「戻る、戻らないは、お前次第だ。だが、何も知らないということは、それだけ自分の身を危険にさらすことになる。とりあえずは失った記憶を取り戻すことだ」

記憶を取り戻すと言われても、何をどうすればいいのか。

如月は、和沙の出生のことを詳しく知っているらしいが、本当に全てを信じてもいいものなのか。

和沙は、もっと詳しく話を聞きたいと思う反面、もう何も聞きたくないとも思う。

「もとの世界とか言われても、何も知らないし」

どうして物事は簡単ではないのだろう。

誰かの事情で記憶を消され、また何かの都合で連れ戻されるというのなら、和沙という人間の意志はどこにあるというのか。

「記憶が戻れば、在るべき場所へ戻れるだろう。記憶の欠片は身近なところにあるはずだ」

如月はそう言って和沙をますます混乱させるように微笑んだ。

帰宅した和沙は、ズボンのポケットから家の鍵を取り出しながら、両親の留守にほっとすると同時に、少し心細さも感じていた。

しんと静まり返った家の中は、いつもより広く感じられた。両親揃って、友人の結婚式に招かれて一泊二日に出掛けてしまっていた。一人で留守番をするのは初めてではなかったが、今日はやけに二人の姿がないことが寂しく感じられる。あんな話を聞いた後だからだろうか。一戸建てのこの広い家に自分しかいないのだと思うと、どこか身の置き所がなくて落ち着かない。

今頃は、二人きりでいちゃついているのだろうか。いつまで経っても新婚気分の抜けない二人のことを思い浮かべて、和沙は少し笑ってしまった。些細な口論すら和沙の前ではしたことのない二人が、他の家とは随分と変わっていることを和沙は知っていたが、あの二人にはずっと今のままでいて欲しいと思う。そして、そんな二人がいない灯りの消えた家に帰るのは寂しいと思ってしまう。

部活が本格的に始まり、体力づくりだといって走らされて、くたくたになっていた和沙は、家中の灯りを点けてからシャワーを浴びに行く。

部活でかいた汗を洗い流すと少しすっきりするが、普段なら気にも留めないことが気になるのは、如月の言動のせいだろうか。

和沙は鬱々としてくる気分を切り替えようと居間に戻るとテレビをつけた。

いつも見ているバラエティー番組がちょうど始まったところだった。人の笑い声が聞こえて家の中が俄かに温かく感じられた。

時計を見ると八時を少し過ぎたところだった。

濡れた髪をタオルでごしごしと擦りながら、夕飯に何を置いていってくれたのかキッチンに行ってみると、鍋の中にクリームシチューと、冷蔵庫に野菜サラダを見つける。電子レンジで温めている間に着替えを取りに二階の自分の部屋へ上がる。

部屋の中は、黒をベースにした勉強机と、中学に入学した時に買い換えたベッドがあるくらいで、あとは作り付けのクローゼットがあるくらいだった。物はあまりなく、床の上に読みかけのサッカー雑誌が数冊散らばっていた。

パジャマ代わりに来ているスウェットを出そうとクローゼットを開けた和沙は、扉を開けた瞬間ありえないものを見て、そのままバンッと音を立てて扉を閉めていた。

目の錯覚だろうか。とも思ったが、厭な予感が脳裏に渦を巻く。

「コン、コン、コン、コン」

クローゼットの中から扉を叩く音が響く。

和沙は無意識に後ろに一歩引く。明らかに人間ではないものが、クローゼットの中にいる。そして、それと目が合った気がした。それは、あの時と同じ憎悪に満ちた眼だった。

鬼とは、肉体を持たない自我だと如月が言っていたことを、今になって思い出す。

最初の襲撃の時は人間だったせいもあって、襲われるなら人間にだと思い込んでいたらしい自分の迂闊さを今さらながら実感して、和沙は、笑いたい気分だった。

「ダン、ダン、ダンッ」

再び扉を叩く音がして、和沙は現実に戻される。

頭の片隅にはやけに冷静な部分があって、はやく逃げろと警告しているのに、もう一人の自分はそれをまだ現実だと思えないようだった。棒立ちになる和沙をそのままにして、その音の間隔は次第に遅くなり、一撃一撃が強く激しくなる。

そして、とうとうクローゼットの扉をぶち破って、中にいたモノが外に飛び出してくるのが見えた。

ソレは、人とは呼べぬ代物だった。

黒い塊。手も足も無く、ただ眼だけが異様に光を放ち、裂けた口がにたりと嗤う。

身体を覆いつくすような影が迫ってきても、和沙は身動きひとつ出来なかった。

頭の中では、逃げなくてはならないと思うのに、小指の先一つ動かさず、それを凝視することしか出来ない自分がいた。

そして、闇が渦を巻いて、和沙に襲いかかってきた。

和沙には、あの時のぼんやりとしたものが次第に形を成していくように思えた。自分を殺そうとする意思があるという事実。そして、初めて、その意味を理解したような気がする。

和沙は死を覚悟した。

死は自分のすぐそばに在ることなんて当たり前なことなのに、どうして自分はそれを忘れていられたのだろう。

黒い闇の塊が、和沙を呑み込んだ。

そして、闇に包まれながら和沙は、遠くで誰かの声を聞いた気がした。

---

身体の芯から凍えるような寒さで、和沙は目が覚めた。

視界は暗く、凍えた身体は自分のものではないような気がした。けれど、意識だけははっきりしていた。それは不思議な感覚だったが、不快なものではなかった。

和沙は起き上がろうとして、全身に倦怠感が広がり、またその場に倒れこむ。

そこは自分の部屋の中だった。自分の身に何が起こったのか定かではなかったが、どうやらまだ生きているらしいことは分かる。

視界の中に赤い染みが広がっていた。

気が付けば和沙は血の匂いを嗅いでいた。

あれは、誰の血なのか。

襲ってきた奴のものなのか、それとも、自分のものなのか。鉛のように重い身体は、その血が自分のものだと言っているようだった。

ゆっくりと右手を上げてみる。今度は微かだが動かせた。けれど、とても眠い。

すぐ側に人の気配を感じた。どこか懐かしくて、優しい香りが鼻をくすぐる。けれど、とても眠くて、和沙はその人の気配を感じながら眼を閉じていた。

## # 2

---

闇の静寂。淡い月明かりの下で、泉の畔(ほとり)に腰を下ろすぼくたちがいた。

ぼくは隣に座るその女の人を、少し後ろから見ていた。長い黒髪、染めていない生成(きな)りの着物、細くしなやかな肩の線。

その女の方は、少し欠けた月を見上げながら、昔話をするみたいにぼくに語りかけた。

「私の故郷は、あの月のようなところ。見えているのに届かない。そこにあると分かっているのに辿り着けない場所(ところ)」

その声は柔らかく、そして温かい響きがした。

ぼくはその人の顔が見たいのに、どうしても動けなかった。

よく知っているはずなのに、今はその人がどんな顔をしていたのか思い出せない。それがもどかしかった。

「還りたいのか、そうでないのか。私自身にもわからないのにね」

寂しげな声は、自分に向けられたものではないせいなのか、とても遠く感じる。

ぼくは、彼女の手を握(すが)り、そして、言う。

「どこに行っても、御方様の側にいます」

ぼくの声が届いているのかいないのか。彼女は月を仰いだまま、その口元が少し寂しそうに笑う。

だって、あの時、ぼくは約束した。ずっと一緒だと。どこへでも行くと。

けれど、御方様は、何も応えては下さらなかった……。

---

次に目が覚めたとき、和沙は布団の中にいた。

柔らかく温かな繊維に包まれて、いつまでもそこでまどろんでいた気分だった。けれど、昨夜のことを唐突に思い出し、和沙は瞬時に覚醒した。

自分がどうして布団の中にいるのか分からなかった。

あれから一体何があったのか。

「大丈夫か？」

そう声を掛けてきたのは父だった。

ずっと自分の側に付いていてくれたらしかった。疲れた顔をしている。一体どれ位の間、自分は眠っていたのだろう。

今はもう寒くはなかった。けれど、起き上がろうとする和沙を父は止めた。

「一体何があった？」

そう問われて、和沙は何を言えばいいのか分からず唇を噛む。

自分は鬼に襲われた。実体を持たないはずの鬼に、身体を弾き飛ばされ、壁に叩きつけられた。身体中の空気が抜けたみたいに苦しくて、それと同時に厭な音がして床に落ちた。

痛みはすぐに襲ってきた。再び、鬼は和沙を弾き飛ばし、そしてまたその繰り返し。身体中の骨がバラバラに砕けたような感覚がした。そして、裂けた皮膚からは鮮血が飛び散っていた。

そこまで思い出して和沙は気分が悪くなる。

顔から血の気が引くのが自分でも分かるくらいに。そして、どうして自分がまだ生きているのか不思議に思う。

記憶の断片ばかりがぐるぐると頭の中に散らばって、一つにまとまらない。

あの後、アレはどうしたのか。そして、その時に付けられた傷が今は何も残っていないことも不思議だった。それなのに、自分の身体からはまだ血の匂いがしているような気がして、和沙はひどく後ろめたい気分になる。

「もうしばらく休め」

父さんはそう言って和沙の額に温かな掌を乗せる。

和沙はその手を握り、父を引き止めた。

自分でも理由の分からないことを他人に説明するのはとても難しいことだった。

自転車が壊れた時のことから、昨夜、如月に聞かされたこと。そして、今のこと。自分の知るすべてを打ち明けていた。別に如月はこのことを口止めはしなかった。荒唐無稽過ぎて、信じる者などどこにもいないからだろうか。けれど、父さんは辛抱強く和沙の話を聞いてくれた。

けれど、自分が人間ではないのかもしれないということは言えなかった。もう父さんたちは知っているのかもしれないが、自分の口からは言えなかった。それを言ったら、今までの全てが嘘か幻のようになってしまいそうで、和沙は、結局それだけはどうしても言えなかった。

翌日、和沙は学校を休んだ。

身体のほうはもうすっかりよくなっていたが、今までと同じにしていられる自信がなかったからだ。けれど、何をやる気にもなれなくて、和沙はずっと布団の中にいた。

ずっと布団から出て来ない和沙の様子に、不安そうに二階を見上げる妻の美小夜を、和臣はそっと抱き締めて、大丈夫だと耳元で囁いた。

「あの子は、何があっても俺たちの子供だろ」

「でも、あんな姿、見たくないわ。別人のように怯えて、苦しんで」

「大丈夫だ。やっと、手に入れたんだ。君も和沙も。今は大切なものを守るのに邪魔をするものはいない。あの子を引取るときに約束したことを覚えてるか。彼女はあの子を幸せにして欲しいと言った。けれど、いつか、あの子は彼女の元に戻るかもしれないとも考えた。それでも、自分たちは家族になろうと決めたはずだ。和沙はこれからもっと苦しくなる。その時に、俺たちがこんな風にうろたえていたら、和沙は余計に苦しくなるだろ」

「和くんが、いなくなるの？」

「それはまだ分からない。でも、子供はいつか大人になって親の元を離れていくものだろう。それも分かるよね」

和臣は美小夜をなだめながら、和沙に真実を告げる時がきたことを知る。

和沙が何を苦悩しているのか、本当のところは何も分からなかった。だが、このまま真実を告げずに済ますことはもう無理だろう。

和沙がこの家にきて十五年。小さかった赤ん坊も、もう大人だった。

和臣は、覚悟を決め、そして和沙の部屋のドアを開けた。

---

ベッドの中で布団を頭まで被って丸まる和沙に、和臣は、話があると声をかける。だが、和沙はそのまま布団から出ようとはしなかった。

「お前に、話していないことがあったな」

和臣はベッドの端に腰を下ろし、静かにそう口を開いた。

「お前がこの家に来た頃のことだ。周囲の反対を押し切って母さんと結婚したばかりだった。その頃、余命半年と宣告されていた母さんは、結婚の申し込みにどうしてももうなずいてくれなかったんだが、死ぬ気で説得した。たとえ半年でも共に過ごしたことの証しが、何か欲しかったんだ。そして、籍を入れて三ヶ月が過ぎた頃、女が訪ねて来た。今のお前とそう年は変わらない、若い女だった。けれど、彼女は少女と呼ぶには大人びていた」

和沙は、父の言葉に耳をすませながら、如月から突きつけられた現実が迫ってくるのを意識した。

和臣はそんな和沙の葛藤に気づかず続ける。

「その女は、頼みがあったと言った」

それを聞き届けてくれるのなら、美小夜の病を治してくれるという。

いかにも胡散臭い話だった。けれど、彼女に宣告された余命は残り僅かだった。助かる方法があるのなら、試さずにはいられなかった。

その女は、小瓶を一つ渡し、その中の薬を水に溶かして彼女に与えろと言った。

半信半疑で彼女に薬の入った水を飲ませた。勿論、誰にも内緒で。

「そして、母さんは元気になった。奇跡だと皆は言った。けれど、それはあの女がくれた薬のお陰なのは明白だった。そして、母さんが退院してすぐに女は再び訪れた。今度はその腕に赤ん坊を抱いていた」

それが、和沙だった。

けれど、これでは自分たちばかりが得をしているようで、申し訳ないような気がした。病気のせいで子供を産めない身体になってしまった美小夜は、そのことも気にしていた。けれど、病気を治した上に、望んでも手に入らなかったはずの子供まで授かるなんて、あの時の自分たちには過ぎた幸福だった。

『この子を幸せにして欲しい』

今にも泣きそうな顔だった。

「病気のせいで子供が産めない身体になっていた母さんは、その赤ん坊を渡されたとき、戸惑いながら、だが嬉しそうに微笑んでいた。小さくて今にも壊れそうな頼りない赤ん坊をそっと抱く姿はとても幸せそうだった」

そして、女はそんな彼女を見てほっとした顔をして立ち去った。

「いつか、お前のことを迎えに来るような気がしていた。そして、あの時に母さんに使った薬がここにまだ残っている」

そう言って差し出された手の中には、小さなガラスの瓶があった。

その小さなガラスの瓶の中には、青い透明な丸薬が入っていた。

「これは、お前のものなのだと思う。今までたいした病気に罹ることなく過ごしてきたけれど、これから先、何が起こるか分からない」

だから、これはお前が持っていなさい。和臣は、そう言って和沙の手にそれを握らせる。

「まだ、ここに居てもいいの？」

「当たり前だろう」

「オレ...、ぼくは、人間じゃないかもしれないのに」

和沙が、自分のことをぼくと言わなくなったのはいつだったろうか。

久しぶりにそれを聞いて和臣は、懐かしさに胸が締めつけられる。

「それは、違うだろう。お前はお前なんだし、十五年間ずっと家族だったんだ。今さら何が問題なんだ？」

「このままここにいたら、巻き込んでしまうかもしれない」

和臣は、何に？とは聞かなかった。

和沙が混乱しているのは分かったし、自分が何者なのか疑問に思っていることもわかる。それなのに、これ以上追いつめるようなことはしたくなかった。

「鬼に狙われているのは確かなのだろうが、お前は死ななかつた。それで充分だ」

「でも」

和沙はそう言いかけ、口を嚙む。

和沙は、これ以上、父や母に自分のことを知られたくなかつた。如月の言うことの全てを信じたわけではない。けれど、鬼に襲われてわかつたことがある。

あのとき、自分は確かに死んだはずなのに、擦り傷ひとつなくまだ生きているのは、如月の言うように、自分がふつうではないからだ。

人間のふりをしてずっと騙していたなんて、そんなこと、知られたくない。たとえ父や母が全てを承知だったとしても、騙していることに違いはない。

「お前が何を気に病んでいるのかは大体分かるよ。けれど、それは今本当に必要なことなのか。やらなくてはならないことは、もっと別にあるんじゃないのか」

「やらなきゃならないこと？」

「お前をここに預けていったあの人の為に」

ずっと自分たちが育ててきたのだ。和沙の幸福を望むのは、彼女との約束だからだけでない。自分の手の中に託された小さな命を守りたいと、和臣が思うのは自然のことだった。

「あの人の願いは、こんなことじゃなかつたはずだ」

「でも、ぼくは」

何かを思い出しかけているのか、和沙は迷うように言葉を濁した。和臣は、それを和沙の口から聞きたくなかつた。

「それから、もしも、彼女の元に戻らなければならなくなつたとしても、黙っていなくなることはしないであらう。約束だ」

和沙は、それにも何も応えられなかつた。ただ、ずっとこのままここにいたいのだと、そう駄々をこねて甘えてしまつた。

何もかもが厭で、何も考えたくない。先のことなんて何も分からないし、それを怖がっている今の自分が情けなくて、消えてしまいたいとも思う。

そんな甘えた感情が、和沙の言葉を奪っていく。

迷う和沙をしばらく見ていた和臣だったが、その沈黙に耐えられなくなつたのは和臣の方だった。

「和沙。父さんの言うことが聞けないのかな」

和臣は、布団を強引にひきはがすと、和沙の脇をくすぐりはじめる。そこは小さい頃からの和沙の弱点だった。和沙は堪えきれずに笑いだす。



「ごめん。もう止めて」

ひとしきり笑い、苦しい息の合間にやっと和沙はそう訴える。

「お前はお前だよ。他の誰でもない。そして、ここがお前の家だ」

大きな腕で抱き締められて、和沙は懐かしさに包まれた。

小さかった頃のことを思い出す。そして、自分はずっとこの手に守られてきたのだと改めて思う。

「和沙。この名前はお前のものだ。そして、それは俺が付けた名だ」

それは、曖昧な自分をここに縛り付けるものでしかなかった。けれど、とても安心するのは何故だろう。和沙と呼ばれるたびに、自分は許されているような気がした。

「それとも、俺たちでは不満か？」

「そんなこと、ない。ぼくのほうが……」

「お前は俺の自慢の息子だろ。そして、俺はお前の自慢の父親だ」

「自分で言うかなあ」

和沙はいつもの父の軽口に、やっと心から笑うことが出来た。

「母さんにもちゃんと謝っとけよ。引き籠もりの問題児になったこと」

「うん。ごめん」

まだここにいられる。

和沙は、それがとても嬉しかった。二人の子供でいられることが、嬉しい。そして、和沙は、今という時が、このまま止まればいいのにと願った。

それは、この先もずっと一緒にいられないことを知っていたからなのか。変わらずに存在し続けるものなどないと分かっているからなのか。今の和沙には分からなかった。

七月。開けきらない梅雨の晴れ間の空の下。放課後の部活の練習中、和沙はだるそうにグラウンドの周囲を走っていた。

結局休んだのは鬼に襲われた翌日のその日だけで、すぐに学校に通い始めた和沙だったが、以前のようにはいかなくなっていた。

人を避けるようになり、無口になっていた。優介は、何も聞かないでいてくれたが、本当は何があったのか知りたがっていることも、知っていて気づかないふりをした。

あの時の感触と光景が何度も蘇り、和沙は最近よく眠れなかった。そのせいなのか、ぼんやりとしていて飛んでくるボールに気付かなかった。

誰かが危ないと叫んだ気がした。和沙はその声に反応したが、その時には遅く、目の前が急に真っ暗になる。

それほど強く当たったわけではないのに、その場にきれいに倒れる和沙を見て、周囲にいた部員たちは慌てて集まってきた。

心配そうに皆が集まり、倒れる和沙を囲み様子を伺う。

程なくして和沙は意識を取り戻した。だが、和沙が目覚めて一番に飛び込んできたのは、逆光になり黒く塗り潰されたような顔の群れだった。

自分を覗き込む顔は全部黒く、それら全てが鬼に見えた。周囲の人間全てが鬼に憑依され、自分を狙っているような妄想にとらわれ、その光景に青褪める和沙は、必死で叫び声を殺す。

みんな自分を心配してくれていることは分かっていた。けれど、鬼に襲われたときの記憶が鮮明に蘇ってきて、吐き気が込み上げてくる。

理性ではわかっているのに、込み上げる嫌悪は自制を振り切って表に出ようと足掻いていた。

「大丈夫か」

気分が悪そうな和沙を部長が気遣いながら、ゆっくりと助け起こす。

蒼白な顔色のまま顔を覆う和沙に、今日はもう帰った方がいいと言う。頭を打ったようだから病院にも行っとけという声を背後に聞きながら、和沙はその場から逃げるように部室に戻っていた。

---

部室で一人になると、和沙は、しばらく震えが止まらず動くことができなかった。

いつもの倍以上の時間をかけて着替えると、一つ大きく息をする。

鬼に襲われたことは確かに気持ちのいいものではなかったが、それ以上に和沙が怯えるのは、自分のことだった。父と母は薄々感づいてはいるのだろうが、以前と変わらずに接してくれていた。けれど、他の人までがそうだとに限らない。

不老不死というものの存在を認めたわけではない。けれど、自分自身の身に起こったことは否定のしようがなかった。それでも学校に通い人間のふりをするのは、周囲の人達に心配をかけたくないからだ。父や母、そして優介のことを思うとその暗い思考に飲まれてはならないと強く思う。けれど、どう接すればいいのか分からない。いつもどおりでいいと言われても、それはそれで皆を騙しているような気がして、辛い。けれど、誰とも会わないように校門へ向った和沙だったが、門の所には優介が待っていた。

「大丈夫か」

まだ青い顔をしている和沙に、優介は何と声をかけようかずっと迷っていた。いつものように教室からグラウンドを眺めていて、和沙が倒れた様子を見ていた優介は、すぐに教室を出ていた。

最近、何かに悩んでいるのはわかっていたけれど、和沙はそれを優介にうちあけようとはしない。この前、襲われたことと関係があるのではないかとも思うが、和沙から話してくれなければ、優介にはどうしようもなかった。けれど、このまま何も知らないふりなんて続けられるはずもなかった。

「身体の具合でも悪いのか。この前、休んだときから変だよ」

「夢見が悪くて、ちょっと寝不足なんだ」

「どんな夢か聞いたら迷惑？」

「スプラッター系のホラーだから、あんまり思い出したくないけど。聞きたい？」

「遠慮しとく」

優介は、うまく誤魔化されてしまったと思いながら、その先を深く追求することが出来なかった。

これ以上追求して追い詰めるようなことをすれば、和沙がすぐにでもいなくなってしまう気がして怖かったのだ。

優介は、和沙に対していつも不安を感じていた。

側にいるのにどこか遠くを見ているような、そんな気配を漂わせるときが和沙にはあった。見えない何かを探しているように、その目はここにはないどこかをいつも思っているようで、それが寂しくもあり、そして、怖くもある。

和沙がここを去ることを決意したら、きっと自分のことなんて忘れてしまうのだろう。

優介は、隣を歩く和沙といつまでこのままでいられるのだろうか、赤く染まり始めた空をふと見上げていた。

帰り道。和沙と優介は懐かしい場所に立っていた。

中学の頃の通学路。どちらからともなくなんとなく遠回りをして、気がつくとその場所にいた。

川べりの道は人影もまばらで、犬の散歩をしている人がのんびりと世間話をしていた。そこで、初めて優介と和沙は言葉を交わした。

「あの時、助けてくれて、本当に感謝してるんだ。それまで、オレはずっと一人だったから」

優介は、物心ついたときにはもう、一人だった。両親は仕事が忙しく、その上、弟たちも生まれ、優介の存在はとても希薄だった。

優介が手の掛からない子供だったこともその一因だったのかもしれない。

けれど、どうして自分がこんなにも一人なのか、いくら考えても明白な理由は見つからなかった。

人に交わりたくて、人の輪の中に入りたくて必死だった。自分も人間なのだと、分かってもらいたかった。だから、人から話しかけられれば嬉しくて、虐められても後をついて行った。

悪循環だった。

虐められるのは辛かった。けれど、それでも存在を無視されるよりはましだった。けれど、それもやがて人の目に余る光景となる。

そして、大人たちは一番簡単な方法を選んだ。異物があるのなら排除すればいい。そういうことだ。自分たちの目の届かないところにやっ飛ばせば、とりあえず平穏な生活に戻ることができる。そして、優介は別の学校へと移された。だが、そこでも自分はやっぱり異分子でしかなく、長年染み付いた人との接し方も変えられず、下僕を演じた。

和沙は、そんな優介のことを少しは気にしていたのかもしれない。それまで時々、和沙と目が合った。けれど、お互いに近づくことはなく、その日は来た。

下僕の役目。それは、彼らの憂さ晴らしに殴られることだった。

優介はこのまま殴られて死ぬのかもしれないと思った。けれど、不思議と悲しくはなかった。痛みは全身に広がって、どこが痛いのかさえ分からなくなっていた。

夕暮れの空。

季節は冬。

人通りのない路地。そして、和沙がそこにやってきた。

その道は和沙の家とは反対方向だった。なのに、どうして和沙がそこにいるのか。そう思ったのは、優介を殴っていた奴らも同じだった。

色素が薄いせいで目立つ美少年に、一度は喧嘩を売ったことはある者ばかりだった。和沙が養子だと知ってか知らずか、そのことをからかってその逆鱗にふれ、逆にのされた記憶が彼らの脳裏に苦々しく蘇る。

「何しに来たんだよ」

虚勢を張っても声が震えているのは、その時の記憶が生々しいせいなのか。

「斎藤に用があるんだ」

和沙は彼らを真っ直ぐに見つめる。彼らは、気まずそうに目を見合わせて、そして、まるで、和沙とは関わらないほうがいいとでもいうようにさっさと立ち去った。

「大丈夫か」

和沙は、起き上がれない優介をそっと覗きこむ。

「歩けないか」

どうしようかな、と考え込む和沙に、優介は痛む身体を強引に動かしていた。

「無理するなよ」

和沙は、急かすことはなかった。ゆっくりと身体を起こした優介に手を貸して、そして、自分の家に連れて行った。

虐めていた連中は、優介の顔は殴っていなかった。服で隠れる場所を狙うのは、自分たちのしていることが真っ当なことではないという自覚があるからなのだろう。けれど、そのおかげで帰り道、誰かに見咎められることはなかった。

---

「あの時、本当は迷っていたんだ」

和沙が重い口を開いた。

「余計なお節介なのかもしれないって」

「それなのに、助けてくれたんだ」

「初めてだったんだ。はっきりと人の顔が見えたの」

和沙は、以前から人の顔を覚えるのが苦手なのだと書いていたが、優介にもそれは初耳だった。

「父さんと母さんは普通に見えるのに、他の人の顔は後になって思い出そうとしても思い出せないんだ。その場では雰囲気とか話し方で何とか区別はつくんだけど、人の顔を覚えない奴っていうふうに思われてる分には別に平気だったから、それでもいいと思ってたんだけどな。でも、優介が転校してきて、その時、なぜだか分からないけど、優介の顔がやけにはっきりと見えたんだ」

「それで、助けてくれたのか」

「だって、それまではそんなふうに見えるヤツなんていなかったし、ただ何となくそこにいるだけで、誰かに興味を持つなんてこともなかったし」

「何でオレだけが見えたのかな」

「それは、オレも知りたい」

「如月という人は、どうだったの？」

そう問われて、今まで意識していなかったことに和沙は初めて気がつく。

「見えてる」

自分と深く関わる人間だけが見えるのか。今さらながら、和沙は自分の特異さを実感する。

「でも、あの人の場合、そういうの関係なしに自分の思い通りに出来そうな気もするけどな……」

優介は、軽い口調で話をはぐらかそうとする和沙に、また不安を感じる。和沙は、普段どおりに笑っているのに、どうしてこんなにも落ち着かない気分になるのか。

「あれから、何かあったのか？」

優介は、和沙が何を悩んでいるのか知りたかった。自分の力なんてたいしたものではないけれど、話をきくくらいならできるはずだ。

「オレの本当の親のこととか、聞いたんだ。今の母さんが病気だったのを治してくれたらしい。そして、子供ができない母さんのためにオレは今の家に預けられたみたいなんだ。幸せになれて、さ」

「如月っていう人に聞いたのか？」

「父さんも同じことを言ったから、本当のことなんだろうけど」

「何でも一人で抱え込むなよ」

優介は和沙の心を読んだかのように、ぼつりと言った。

「何かあったら絶対に誰かに相談して、絶対に一人でいなくなるなよ」

「でも、このままオレがここにいたら、きっと迷惑をかける」

「黙っていなくなるのだけはダメだからな」

優介の言葉は、今の和沙の不安を打ち消すように力強く響いた。

「分かってる。それに、まだここにいられないとは限らない」

和沙は、自分次第なのだという言葉に、すぎるような思いでしがみついていた。

決めるのは自分だ。けれど、今の自分には何かを決断できるだけの材料は何もなかった。ただ如月の言葉に翻弄され、認めたくないものから目を背けているだけのように思えた。けれど、自分が普通の人間じゃないと告白するには、まだ勇気が足りなかった。

「如月さんの家って、ここから遠くないんだろ。今から行ってみないか」

優介は、頑なに何も話そうとしない和沙の悩む顔を見て、不意にそう思いついた。

「その人に、おれも会ってみたい」

和沙は、優介を如月に会わせたくなかった。けれど、うまい断りの言葉が見つからなかった。

二人で、如月の家へと向かいながら、和沙は、少しほっとしてもいた。

優介は和沙を責めることはしなかった。ただ、和沙のことを心配しているのだ。だから、和沙は、そんな優介に隠し事をしていることが辛かった。優介が如月に会って和沙の真実を知ったら、そう思うと、今もまだ怖い。そして、これでもう一人で悩む必要はなくなる、そう思う自分がひどく汚いものに思えた。

## # 3

---

これまでの和沙の話からすると、如月という人は相当変わった人なのは確かだった。だが、こんな普通のアパートに住んでいることが、優介には笑えた。

「引っ越して来たばかりだって言ってたから」

きっと家は別にあるのかもしれない。と、和沙は続けた。

このアパートは仮宿に過ぎず、そして、その姿もまた仮物なのか。

「フリーライターって、何を書くんだろうな」

こんな田舎じゃ、派手な事件なんか起こらないし、観光ガイドにしても他の田舎とそう大差ない。優介は、素性の怪しい男と和沙を二人きりにすることが不安だった。

「この近くに遺跡があるだろ」

「ああ、あれか」

小学校の時に遠足で行ったことがある。ちょっとした公園のようになっていて、子供が遊ぶのには十分な場所だった。弥生時代から平安時代までの住居の跡があり、少しは名の知れた遺跡である。その近くには博物館もあったりして、大型の観光バスも立ち寄る。

「もっともらしいけど、嘘臭いな」

「ほんとに」

和沙がそう同意したところで、建物の影から足音が聞こえた。夕方ということもあってアパートの他の住人も家にいるらしく、テレビの音が微かに聞こえてくる。

それまで外に人の気配はなかったが、如月の部屋の前で壁に凭れているのを見られるのはあまりいい気がしない。悪い事をしているわけでもないのに、なんだかばつが悪い。

けれど、やって来たのは待っていた当人で、和沙はほっとする。

「待たせてしまったみたいだな」

如月は和沙たちが来るのを予め知っていたような口ぶりで、愛想の良い笑顔を向ける。

この前とは違って黒のジーパンに黒いTシャツ姿のその手には、コンビニの袋を提げていた。ここに来る途中にコンビニにはなかったから、きっと反対方向に出ている、行き違ったのだろう。

「何もない所だが、ゆっくりして行け」

如月は、いきなり訪ねたにもかかわらず、ごく普通に二人を迎えた。ホルダーの付いていない鍵をポケットから取り出して、開錠すると中へ先に入る。

和沙と優介もその後が続いた。アパートの中は、この前となにも変わっていなかった。家具はなく、寒々しいばかりの部屋の中は、まったく生活感がない。

「なにか思い出したことはあるか」

如月に、そう問われて、和沙は言葉につまる。そして、如月に自分が人間ではないと聞いた直後に、鬼に襲われたのは、果たして偶然だったのだろうか、その時になって、和沙はそんな疑問を感じる。

だが、如月は和沙の答えを待たずに、優介を見る。

「君は、和沙の何を知りたいんだ」

「今、起こっていること全部です」

「それを知って、どうする」

「聞いてから考えます」

「和沙は、知られたくないんじゃないか」

「そうだとすると、和沙の友人として、後で悔やむようなことはしたくないんで」

「和沙が狙われていることは、和沙から聞いているんだろ」

「詳しくは知りません。でも、なにか危険なことにまきこれてるのは、分かります」

和沙はうつむき、手の中のジュースのペットボトルを見つめる。

「和沙を狙っているのは、鬼。その鬼の目的は不死身の身体だ。かつて人間だった鬼は、人間に戻りたがっている。それも、死ぬことのない人間に」

「不老不死、ですか」

「ありえないと思うか？」

和沙には、如月はこの前と同じように混乱させて楽しんでいるようにしか見えなかった。けれど優介は和沙とは違った。

「つまり、和沙は、鬼を宿せる数少ない人間だということですか」

優介は、如月の難解な説明から何かを読み取ったのか、曖昧な物言いをした。けれど、和沙はそれを聞きながら、どきりとする。そして、それを聞いて、如月は笑みを深くする。

「それは、和沙が知っている」

いきなりそんな風に話の矛先を向けられて和沙は狼狽(うろた)えた。そんなことは知らない、即答できないことが、和沙を追い詰めると知っていて、如月はそれを言ったような気がした。

優介は、和沙が何も言えないで困惑しているのを庇うようにして、如月を見る。

「不老不死って、人魚の肉を食べたとかいう八百比丘尼(やおびくに)のことですか？」

「人魚ではないが、その伝承の中にも一片の真実はある」

「それじゃあ、錬金術の賢者の石の方ですか？」

不老不死の伝承は色々ある。如月の言う鬼とやらが欲しがっている不死の身体が存在するというのなら、それらの伝承もまるっきりの作り話というわけでもないということになるのだろうか。優介はそんなふうに考えていた。和沙が不老不死かどうかなんて、自分には分からない。けれど、優介は和沙を理解するためには、それを否定してはいけないような気がした。

「君は、なかなか面白いことを知っているようだ」

如月は、分からないなりに理解しようとする優介に好意的な視線を向ける。

「錬金術は実際に中世ヨーロッパでは大流行していますけど、それと関係があるんですか」

そんなものは無いと否定してしまうのは簡単だったが、如月は、優介に興味を覚えたのか、突飛なことを言い出した優介を笑うことはしなかった。

「闇から闇へと語り継がれてきた禁断の法が周知の事実ということは在り得ないが、魔法というよりは近い。錬金術と言う者もいるが、実際その真理を知る者は極僅かしかない」

その口振りは、自分はすべてを知っているとでもいうふうに、思わせぶりだった。優介は、そんな如月を見て、ふと思う。

「如月さんも、不老不死なんですか」

「ああ。そのとおりだ」

「それじゃあ、如月さんも、鬼に狙われている一人、だということですよ」

「それは、違う」

「だって鬼は不死身の身体を狙うんでしょう。それじゃあ理屈に合いません。和沙だけが狙われるなんて、おかしいじゃないですか」

そう、それでは理屈に合わない。如月の話す内容が把握しにくいのは、すべてに於いて曖昧だからだ。いろんなことを喋っているようで、その実、核心に触れることは何一つ語っていない。鬼だとか、不老不死だとか、もっともらしいことを並べたてながら、本当のことは何も言っていない。そんな気がした。

「あなたは、何者なんですか」

「私と和沙は同じものではないということだな。和沙は、今、狭間にいる。人間になるのも、元に戻るのも、和沙次第だということだ」

「そして、如月さんは、和沙を元に戻したいってことですか」

「そういうことだ。だが、無理やりに戻すようなことはしない」

戻りたくなるように仕向けることはしても、ということなのか。和沙の気持ちが一番に考えているようで、まったく違うようにもとれる。

「如月さんは、鬼を退治できないんですか」

「近くにいれば分かるが、和沙を狙ってる奴は頭がいい。身を隠す術を知っているから簡単には捕まらない」

「それじゃあ和沙は、これから先ずっと鬼に狙われて生きていかなくってはならないってことですか」



「和沙が全部思い出せたら、そんなことは大した問題じゃない」

「今まで、鬼なんてどこにもいなかったのに、まるで如月さんが連れてきたみたいですね」

「人になるのかどうか決めるのは、和沙だ」

「和沙は、人間です。決めるとかそういうのは、もう和沙が人間じゃないって言ってるみたいで、卑怯です」

如月は優介の言葉に、言葉ではなく皮肉のような笑みで応えた。

「和沙は和沙です」

自分には和沙が必要なんだと、優介は心の中で叫んでいた。そして、この人にだけは和沙を渡したくないと思った。自分に何ができるわけでもなかったし、人外の力を持つ如月に勝てるとも思ってはいなかった。けれど、何もしないで和沙を渡すのは、どうしても嫌だった。

優介の心は決まった。そして如月は、和沙に水を向ける。

「お前は、いい友人を持ったな。それに、いい家族だった。優しい人たちに囲まれて、今の幸福をまもるのもいいだろう」

だが、きっと、今のままではいられなくなる。

「まだ、時間はある」

和沙には、その如月の言葉が呪いのように聞こえた。そして、まだ和沙の心は迷っていた。

如月の部屋を後にして、その帰り道。優介と並んで歩く和沙の足取りは重かった。

優介はどう思ったのだろう。こんな妙な話の展開になるのだと分かっていたら、絶対に連れては来なかったのに、今となってはもう遅い。

だが、命を狙われているのは和沙であって、優介ではない。それだけがまだ救いだ。けれど、このまま自分と一緒にいたら優介まで巻き込んでしまうだろう。それは、絶対に避けなければならない。でも、どうすればいいのか。

「このままオレがここにいたら、きっと迷惑をかける」

ここに自分の居場所はないのではないかと、和沙は思う。けれど、もとの場所というのがどこなのかは知らない。今更、戻れと言われても、すぐに帰れるはずもない。

「おじさんとお婆さんは、このこと知ってるの？」

優介は、そんな和沙の不安を読み取ったのか、躊躇(ためら)いがちに問い掛ける。

「このことは秘密な」

「でも、黙っていなくなるのだけはダメだからな」

優介の言葉は、今の和沙の不安を打ち消すように力強く響いた。

「分かってる。それに、まだここにいられないとは限らない。あの人もオレ次第だって言ってたぞ」

和沙は、自分次第なのだという言葉に、縋るような思いでしがみついていた。決めるのは自分だ。けれど、今の自分には何かを決断できるだけの材料は何もなかった。ただ如月の言葉に翻弄され、認めたくないものから目を背けているだけのように思えた。

「決めるとか、選ぶとか、そんなの関係ない。あの人の言葉に洗脳されちゃだめだよ」

優介はそう言うけれど、このまま何も知らないでは済まされないことは、和沙には分かっていた。そして、あとは如月が本当の敵でないことを祈るだけだった。

紗雪は、和沙が少しも振り向かないことに苛立っていた。

この前、学校を休んでから、微妙に雰囲気が変わってきたのも気になることの一つだった。

普段から口数は多くはないのに、挨拶さえろくに返してくれなくなっていた。優介にも同じような態度だというのが、少しだけ慰めである。でも、このまま夏休みに入ってしまうのは物足りない。

あと二週間ほどで夏休みになる。あの鏡のことを打ち明けて、夏休みの間に一緒に調べるといのはどうだろう。

紗雪は、和沙のことが好きなのだとは思うけれど、それを告白したいと思うまで好きではない。好きの一步手前。微妙な感情は、一步間違えたら、はじけて消えてしまいそうで怖い。今は部活を休んでいる和沙を狙って、何人かの女子が近付いたみたいだけど、みんなまともに話もさせて貰えなかったみたいだった。

一条くんと声をかけ、

だれ？という顔をされ、

すぐに興味を失くされる。

素っ気無さ過ぎる態度に、怒り出した子もいるとか。

けれど、それくらいで怒り出すようでは絶対に彼には届かないだろう。紗雪はすでに、それは経験済みである。

紗雪が和沙にこだわる理由。それは、高校に入学する前まで遡る。

春休みに、祖母の家の蔵の片付けを手伝っていて見つけた白い丸い鏡。その中に、紗雪は一人の少年の姿を見た。

その夜、紗雪は祖母の家の客間で一人床に就き、夜中にふと目を覚ました。

別に何か物音がしたわけではない。ただ、唐突に目が覚めた。ぼんやりとした頭で、どうして目が覚めたのか考えるでもなく、紗雪は周囲の物音に耳を澄ましていた。

暗い天井と、畳の匂い。障子が白くぼうっと光っている。しんとした部屋の中は、とても静かだった。春先のこの時期、夜はまだ冷える。布団の温もりが心地好くて、紗雪はまたうとうとしていた。が、部屋の中の様子がいつもと何か違うような気がして、はっとする。

布団に入る時に全ての灯りは消していた。朝には未だ早いのに、ぼんやりと部屋の中が見渡せるくらいに明るい。文机の上に置いた箱の中から光が漏れていた。

紗雪は布団からそっと起き上がった。

文机の前に座ると、夜気が首筋を撫でて背筋に寒気が走る。誰かに見られているような気配がして部屋の中を見回した。だが、六畳ほどの部屋の中は家財道具など何もなく、誰かが隠れられる場所はない。この部屋には押入れさえないのだ。それに続き隣の部屋には母が休んでいる。

神経質になり過ぎて自分を笑って、紗雪は再び文机に向かった。

まだ、あの光は箱から漏れていた。夢現な面持ちで紗雪はそっとふたに手をかけた。ゆっくりとふたを持ち上げると、光がさらに広がっていく。

中には白い鏡がぼんやりと霞んで見えた。白い光は思った以上に強く、眩しくて直視出来ないほどだった。けれど、それもしばらくするとそれにも慣れてくる。

鏡の平らな面の方が光っているらしく、紗雪は鏡を手にとって裏返す。

その刹那、紗雪は白い光の中にいた。

恐怖はなかった。ただ、その不思議に圧倒されていた。

白い光は蛍光灯の色に良く似ていたが、それよりももっとクリアな白で、熱くもなく冷たくもない。その光に包まれていたのは、ほんの一瞬だったのかもしれないし、何時間もたっていたかもしれない。

気が付くと、しんとした闇の中にいた。

夢でも見ているような気分だった。だが、自分の手の中には白い鏡が、蛍火のように微かにその名残を留めていた。

紗雪は、鏡を見るときはなしに見る。そして、夜中に起き出して一体、何をやっているんだろうと、自分で自分の不可解な行動を笑う。

けれど、人の影のようなものが視界の隅を掠めた気がした。

紗雪は気のせいだと思った。だが、手の中のそれを箱に戻そうとしてその手を止めたのは、鏡の中にまた何かが見えた気がしたからだった。

じっとそれを見ていると、微かな光を透かして人影がはっきりと浮かんできた。

紗雪と同じ年頃の、少年だろうか。艶やかな黒髪を軽く後ろで束ね、それに縁取られた顔は白皙の美貌と言っても過言ではない。その繊細な面差しは、現代ふうの雰囲気ではなく、何となく昔の人のような気がした。悲しげな瞳が、何かを訴えるように紗雪を真っ直ぐに見ていた。形の良い唇が何かを告げるけれど、声は全く聞こえない。何かを訴えているのに何も伝わらないもどかしさは、夢のようにとりとめがなく、実感として伝わらない。ただ、その姿に紗雪は見惚れていた。

思考も意識も根こそぎどこかへ飛んでいき、目の中に在るその存在だけが全てになる。それは、想像していたよりもずっと気持ちの良いことだった。

このままずっとこうしていたい。そんな快感が全身を包み込む。それに、これは夢なのだから、何も気にすることなんてないのだと思うと、紗雪はとても自由で、とても幸せだった。

翌朝、布団の中で目を覚ました紗雪は、文机の上に鏡の入った箱を見つけた。

「やっぱり、夢だよな」

夢の中に男の子が出て来ることは滅多にない。ボーイフレンドに不自由はしていないけれど、彼氏が欲しいと心の奥深くでは思っているのだろうか。

高校に行けばまた新しい出会いもあるのだろうが、そんなに切羽詰まっているわけでもない。

紗雪は、夢の中に出て来た男の子をまだ鮮明に覚えていることに、小さくふふっと笑う。

もしかしたら、高校に行ったらその男の子がいたりして。そしたら、これって正夢だよな。そんなことを考え、その時の紗雪は、まだ半分遊び気分だった。

現実はそのなりに都合良くことが運ばないのは知っていたし、これは自分のささやかな願望に過ぎないことも知っている。それに、思うだけなら誰にも迷惑も掛けないし、誰も、自分も、傷つかない。

そう思っていたのに、あの鏡の中に見た黒髪の少年とそっくりな和沙を見つけてしまった。

そして、夏休みまであと一週間に迫ったその日の朝、紗雪は和沙に、放課後に裏庭のヒマラヤ杉まで来て、と強引に約束させた。そうでもしなければ、和沙は少しもこちらに注意を払ってはくれない。

そこで、告白すると両思いになれるという噂があった。けれど、紗雪はそんな噂は信じていなかった。それまで何人も女子がそこで和沙にふられるのを見てきたからだ。だから、恋の告白なんてしない。

ただ、あの鏡のことを和沙に相談してみたかった。

それだけのことだ。

そう何度も自分に言い聞かせていること事態、噂をととても気にしている証拠なのだが、今の紗雪にはそれに気付ける余裕はなかった。

## # 2

---

二時間目の休み時間。和沙はいつものように自分の席でぼんやりとしていた。その周囲には数人の男子がたむろしていた。別に和沙に話しかけるといわけではなく、ただ和沙の側に来て友達と話をしていく。それを和沙は聞くとはなしに聞いていた。

教室の外から和沙は呼ばれた。廊下には見知らぬ教師がいた。そして、戻ってきた和沙は慌てて帰り支度を始めていた。

それを見た優介が、和沙にどうしたのかと尋ねてくる。

「今、連絡があって、母さんが事故に遭って病院に運ばれたって」

市内には救急センターのある大きな病院はなく、隣の市の総合病院に運ばれたらしかった。そして、伝言を持ってきてくれた教師が送ってくれるというので、和沙は急いでいるらしい。

「放課後、藤居さんが何か話があるって言ってたけど、行けなくなったこと伝えといてくれる。ごめんって」

「わかった。おばさん、無事だといいな」

「あとで電話するから」

和沙はそう言って、足早に教室を後にした。

優介はその姿を見送りながら、紗雪を不憫に思う。

彼女は何も悪くないのに、どうしていつもこんなにも間が悪いのか。朴念仁の和沙に、彼女はどんな風に見えるのか今度、聞いてみようかとも思う。だが、その問いを和沙にすることは、これから先、訪れることはなかった。

---

学校の裏門近くにある駐車場には、蝉の音が五月蠅いくらいに響いていた。アスファルトに照り返す強い陽射しが、もやもやと揺れていた。そして、白いファミリータイプの乗用車が駐車場に止まっていた。

見覚えのある車に、和沙の足が止まる。

あの時の男はどんな顔をしていた？

和沙は、最初に男に襲われた時のことを思い出そうとしていた。あの日も唐突だった。その男をまじまじと見ていたはずなのに、それが思い出せない。

高校に入学して一学期も終わろうとしていたが、全ての教師と面識があるわけではない。元から人の区別を顔でしていない和沙にとっては、余計にそれは難しいことだった。

思い出せない自分に苛立ちながら、和沙はその男を見る。そして、それと同時に男は、和沙のみぞおちに拳を当てていた。

そして、和沙は、抵抗する間もなく気絶していた。

### #3

---

昼休み。紗雪は、時間が空いたので放課後に約束していたにも関わらず、和沙の教室を訪ねていた。だが、中に入る前にルミに止められた。

「また、来たのね。一条君に用なら、彼、いないよ」

紗雪の来るのを待ち構えていたかのようにルミは近付いてきて、挑むように紗雪の前に立ちはだかる。

「そうなの」

紗雪はがっかりしていることをルミに悟られないように素っ気無く答え、踵を返す。だが、その後ろをルミが付いて来た。

「紗雪は、ずるいよね。クラスが違うくせに、一条君たちと仲良くって」

「そう？」

「最初に目を付けたのは私なのに、なんで横取りするようなことするの？」

「そんなつもりはないんだけどね」

「紗雪はいつもそう。何でも持ってるくせに、まだ欲しがる」

それがさも悪いことのようにルミは言うけれど、紗雪には少しの罪悪感もなかった。

「欲しいものがあるなら、自分で何とかしなよ」

「紗雪は強いから、そんなふうに言えるんだよ」

「そんなことないよ」

私だって一条君の特別になった訳じゃない。

紗雪はほろ苦い現実をのみ込みながらルミから目をそらしていた。

「私達、友達でしょ？」

だから何だというのだろう。

紗雪は、都合のいい時にだけ友達になろうとするルミの小狡さを少しとましく思う。そして、いつまでもしつこく絡んでくるルミに意地悪してみたい気分になる。

「友達だって言うのなら、私の方にも協力してよ」

紗雪の人をバカにしたようなその言葉に、返す言葉を見つけられないルミは、悔しそうに唇を噛む。

「友達だって言えば何でもうまくいくなでことないのよ。友達だと思ってたって譲れないものもあるでしょ。私は欲しいものがあつたらそれを手に入れる為に努力してるの。誰かに助けて貰おうなんて考える前に自分の出来ることをやってみたら？」

それが一番難しいことなのは分かっていたが、敢えてそれを言ったのは、紗雪自身、苛立っていたからなのかもしれない。

誰だって楽をして目的を達成したいと思うし、他人を利用できるのなら、そっちを優先する。自分に都合のいい人間がいい友達であつて、自分を否定する友達とは呼べない。

誰もが他人を利用して楽をしようとするのなら、自分も同じであってもいいではないかとも思う。

けれど、それだけじゃないものもあるのだと、最近では思うようになっていた。

優介と和沙の二人を身近に感じるようになって、利害の絡まないそういう関係もあるのだと教えられた気がした。そして、そんな二人が少し羨ましかったりもする。

紗雪はルミをその場に置き去りにして、自分の教室に逃げ込んでいた。

ルミの気持ちは分からなくはないが、和沙はまだ誰のものでもないのだ。多少親しいだけの現状では優越感にひたつていられる余裕などない。

やっぱり、あの鏡のことを和沙に打ち明けよう。それまで迷っていた紗雪だったが、そう決心すると少し気が楽になっていた。

---

学校の敷地の外れにある大きなヒマラヤ杉は、学校の裏手にあり、その先には旧校舎が半分ほど残っていた。今はその校舎の一部が改装されて弓道場となっていた。そこは一般の人も利用するので、生徒の立ち入りは原則禁止となつて

いた。放課後になると弓道部の人たちが利用するが、入り口が反対方向になるので、この木の周りはほとんど人が来ない場所だった。

草が生い茂り、手入れもされない場所だったが、誰かが歩いた後が微かに残っていた。  
木陰にいると暑さは少し和らぐ。渡る風は、涼やかで汗ばむ肌に心地好かった。

けれど、いつまでたっても和沙は来なかった。

## #4

約束の時間を十分程過ぎた頃、優介が姿を現したのを見て、紗雪は言い様のない落胆を覚える。

和沙にその気がないのは知っていたけれど、それならそうと直接自分の口からはっきり言って欲しかった。でも、紗雪も告白なんてしていないのだ。告白もされないうちから断るなんて陳腐なこと、やっぱり和沙には似合わない。ましてや、その代理に友人を使うなんてことを和沙はしないと思っていたのに、裏切られたような気がして悲しかった。

「遅れてごめん。和沙は早退したんだ。家の人事故に遭って、それで仕方がなかったんだ。謝っておいてくれて」「事故って、何それ」

紗雪は、思いもよらぬ理由にそれまでの浅はかな自分の考えを恥じる。そんな人じゃないということは分かっていたはずなのに、何か理由があるのだろうとも思ったのに、そんな大変なことだとは思ってもみなかったのだ。

けれど、それでも、その伝言を持ってきたのが優介だというのは、少し悔しい。

「詳しいことは僕にも分からないけど、帰りに和沙の家によるつもりだから。一緒に来る？」

優介は、紗雪を気づかうようにそう尋ねるが、紗雪はそんな気分になれなかった。

「ううん、いい」

「でも、大事な話だったんだろ」

優介が悪いのではないのに、どこまでも紗雪を立ててくれるその優しさが、時々癪に障る。

「私がどうして一条君のことに興味を持ったのか。それを話そうと思っただけ」

紗雪は何でもないのだというふうになさげな装だったが、優介が相手だと全てを見透かされてるみたいに思えて落ち着かない。

「春休みに祖母の家に行ったときに鏡を見つけたの。鏡って言っても、あたしが勝手にそう思ってるだけなんだけど。その中に一条君にそっくりな人が映ったの」

紗雪は、自分でそう言いながら、改めて言葉にしてみるとなんて陳腐なんだろうと思った。

「笑っちゃうでしょ。そんな嘘みたいな話」

紗雪は、自分が奇妙なことを言っているのを自覚しながら、改めて自分が和沙を本当に好きだったのだと分かった。きっかけは確かに好奇心からだった。でも、和沙のことを知れば知るほど分からなくなった。もっと知りたいと、もっと近くに行きたいとその度に思い、気が付けばいつも和沙のことを考えている自分がいた。

「それって、本当に？」

「信じられないのは私も同じ。でも、気になるのも本当」

「その鏡って、まだ持ってるのか」

予想外の真剣な優介の表情に紗雪は戸惑いながらも、笑われなかったことに安堵していた。

「持ってるよ。誰にも見せたことはないけど」

紗雪は、意外な優介の反応に、やはりあの鏡は和沙と何か関係があるのかもしれないと鼓動が早くなる。

けれど、本当なら和沙がそういう風に紗雪に興味を持ったかもしれないのだと思うと、素直になれなかった。

「見たい？」

「ああ」

「一条君も気になると思う？」

「そうだろうな。でも、和沙に見せる前に見せてくれないかな」

「どうして？」

「今、和沙も色々大変で、もしかしたら、その鏡も関係あるかもしれないから。詳しいことは言えないけど」

「どうして？」

再びの紗雪の問いに優介は黙り込む。

「理由を教えてくれないなら見せないって言ったら？」

紗雪は、自分だけ仲間外れにされるのはもういやだった。けれど、次の優介の言葉を聞いて、愕然とする。

「和沙がいなくなってしまうかもしれないって、言ったら？」

「いなくなる？ どうして？」

あの鏡は、そんなに重要なものなのだろうか。

紗雪は不穏な方向に流れる話に不安を覚える。

あの鏡は確かに変わってはいる。でも、普段はただの円い板でしかなくて、もうあの時のように光ることもなかったし、誰かの姿を映すこともなかった。寝惚けて夢を見ていたくらいにしか思っていなかったのに、あの鏡はいったい何なのだろう。

「教えて」

紗雪は、目を伏せる優介に詰め寄る。

けれど、優介は、それ以上何も教えてはくれなかった。

優介は紗雪から逃げるようにその場から立ち去り、そして、紗雪はそこに一人置き去りにされた。

\*\*\*

うだるような暑さの中、微かに空気が重くなる。蝉の声が酷く耳障りだった。抜けるような青空には白く眩しい入道雲が校舎の向こうに見えた。

どれくらいの間、そうしていただろう。

紗雪はひとり、真っ直ぐに天に伸びるヒマラヤ杉の大木にもたれながら、寂しいと思った。

ずっと、和沙の近くに行きたいと思っていたのに、何も分かっていなかった自分が悔しい。そして、それ以上に優介に負けている自分が悲しかった。

紗雪は、遠く広がる空を見上げながら、あの鏡のことを考えていた。

あの後、少し気になって、祖母にその鏡のことを聞いたことがあった。

それは、祖父が生前、今から十年ほど前に知人から譲り受けたものらしかった。

骨董品や、古代の遺跡からの出土品などを集めるのが趣味だった祖父は、珍しいものがあると何でも集めていた。そして、あの鏡もその中の一つだった。

でも、あれは見るからに複製品っぽくて、祖父の趣味とはかけ離れていた。きっと付き合いで受け取ったのだろう。だから紗雪が、それが欲しいと言ったとき簡単に貰えたのだ。

でもそれは、本当はとても貴重なもので、和沙にとってとても大事なものだったのだとしたら……。

いつの間にか、空が暗くなっていた。さっきまであんなに晴れていたのに、灰色の雲が頭上に広がっている。そして、空の上で低く雷鳴が聞こえた。

帰らなくて、と思ったとき、いきなり雨が降り出した。

大粒の雨粒は、熱くなった地面を瞬く間に冷やしていく。乾いた草の上に雨が蒸発する匂いがした。そして、空を鋭く稲妻が横切った。



暗い室内。どこかの廃屋。ひんやりとした空気には微かに湿気がある。

辺りはとても静かで、蝉の声がすごく遠くに微かに聞こえた。

和沙が男に拉致され、車に乗せられて連れて来られたのは見知らぬ場所だった。

自分がどれ位の間、気を失っていたのかは分からないが、街から離れた場所なのは何となく分かった。廃業したペンションだろうか。広間のような部屋の隅にはテーブルや椅子が無造作に積み上げられていた。その部屋の中央に、和沙は転がされていた。

殴られた腹が少し痛んだけれど、それ以外は怪我もない。

和沙は、ゆっくりと身体を起こした。

和沙を拉致した男は、朦朧とした焦点の定まらない目をしていて、目を覚ました和沙に警戒するわけでもなく、このまま逃げ出しても平気なんじゃないかと思えるくらいにぼんやりとしていた。が、和沙が起きたことに気がつくと、その目に妖しい光が灯る。

何かに操られているような変な気配をまといながら、男がゆらりと歩き出す。

最初に襲ってきた鬼はこの男だと、和沙は今さらながら確信する。

それなのに和沙は、その男が少しも怖くはなかった。

これが三度目の襲撃だからなのか、それともこの前襲われたときに、自分の中で自分の知らぬ間に何かが変わったのか。

ただ、自分がとても間抜けに思えた。

今は、助けてくれる如月の姿はなかった。そして、鬼の本性をあらわにした男を前にして、自力で逃げのびることは不可能だとも分かる。それなのに、不思議と和沙は落ち着いていた。

目の前にいるソレが、忘れてしまった何かを思い出させてくれるような、そんな予感がした。そして、ポケットの中に手を入れて、その小瓶を握り込む。

それは、父に渡された薬の入った瓶だった。

夢に出てきた女の人が、ここに残したその存在を証明する唯一の証拠だ。そして、それが今の自分と彼女を繋ぐ一筋の蜘蛛の糸のようなものだった。

鬼は腐臭を撒き散らしながら、和沙に手を伸ばしてきた。

和沙は、何かを待つように、ただ、近付いてくる男のその手をじっと見つめていた。

---

和沙が気絶している間、鬼は、ずっとその身体の綻びを探して、だが見つからず、絶望にも似たいらだちをあらわにしていた。

この少年の身体は天人が造ったものだと思っていた。そして、その魂は鬼。ならば、その中に宿る鬼を追い出して自分が成り変れぬ道理はない。

不老不死の天人が造ったという身体ならば、我の魂を受け止めることもできるはず。

そして、この先その身体は朽ちることもなく、永遠を生きることも叶う。

それなのに、その魂魄は少しの齟齬もなく調和し、自分が入り込む余地がない。

ありえないことだった。だが、どこにも見つからない。

ただの人間であればいっそ簡単なのに、だが簡単であるがゆえにその身体は脆い。今、使っているこの身体ももう腐臭が漂い始めていた。夏という季節のせいでもある。

鬼は、自分のものにならない和沙のその身体を揺さぶり、そして力まかせに壁に叩きつけていた。

自分のものにならぬのなら、こんなものは要らない。

無抵抗にもてあそばれる和沙は、まるで鬼を馬鹿にしているように見えた。

お前とは違うのだと、その優越の中で見下しているように何の抵抗もせず、そんなことをしても無駄だと、無言で諭すようにこちらを見ている。

それが、余計に鬼の憎しみを増幅させる。

お前だって、鬼だろうに。

我とお前、一体どれほどのものが違うというのか。

憎い。憎い。憎い。憎い.....。

憎しみが心の奥底から湧き上がる。憎めば憎むほど苦しくなるのは分かっているのに、それを止められない。

手足をもがれ、中身をばら撒かれた少年が鬼を見て笑った。

そして、鬼は、その笑みに怯えたように悲鳴を上げて、その場から逃げ去った。

## # 2

---

気が付くと優介は、和沙の家の前にいた。いつの間にか夕立はやんでいた。おばさんが事故に遭ったのなら誰もいないはずだった。だから、ここに来て意味はないはずなのに、何かあると決まってここに来てしまう。

紗雪の言っていた鏡は、きっと和沙に関係があるのだろう。そして、それを和沙に教えれば、きっと和沙は楽になれるのだろう。それは分かるのに、優介はどうやってそれを和沙に伝えればいいのか分からなかった。

優介は、和沙の家の前でどこにも行けず立ち尽くしていた。

「優介くん、どうしたの？」

後ろから和沙の母、美小夜に声を掛けられて、優介は我に返る。買い物の帰りなのか、重そうな布製のバックを肩に掛けていた。

「おばさん、事故に遭ったんじゃない……」

「事故？ 私が？」

それじゃあ、和沙は何の為に早退したのか。

「学校に連絡があって、和沙、早退したんです」

「とりあえず、中に入ろう。話はそれから」

美小夜は、手早く鍵を開けると優介を促した。

そして、その夜、和沙は家に戻らなかった。

---

和臣は、連絡を受けてすぐに帰って来たが、警察に届ける前に如月に電話をした。その電話の後、しばらく無言で何かを考えているようだった。

優介は、おじさんは何かを知っているのだとその時分かった。和沙の秘密を知っているから何も言えない。そんなふうに見えた。

「和沙は大丈夫だ。しばらく戻れないけれど、必ず帰ってくるから」

「何があったの？」

美小夜は何も知らないらしく、和臣は先を続けられずに目を逸らした。

「如月っていう人の所にいるんですか」

優介は迷いながら、和臣にそう尋ねていた。

「和沙はここにいたら巻き込んでしまうと、悩んでいたんです。……和沙は、いなくなるんですか」

「君は、どこまで知っている」

「自転車が壊れた時に色々聞いて、そのあとも何かあったみたいで、和沙は……」

自分の出生のことを気にしていた。優介は、最後の言葉はのみこんでいた。それをここで言うのはフェアじゃないような気がした。それに、和沙はこの人たちのことをとても大切に思っている。傷つけるようなまねをしたら、きっと怒るだろう。

けれど和臣は、優介のみこんだ言葉を察したのか、その表情を陰しくした。

「そういうことか」

優介は、自分を押しえられなくなっていた。言うてはいけないとわかっているのに、止められない。

「和沙は、何者なんですか」

優介は、ずっと和沙のことを考えていた。不老不死の話をしたのは、つい最近のことだった。そして、いろいろと調べ物をしていて、その物語が目飛び込んできた。

『竹取物語』

人外の生き物が人間に育てられて、成人すると天から迎えがきて帰っていく。それは、今の和沙の置かれている状況とよく似ているように思えてならなかった。おとぎ話と現実を同じに考えるのは間違っていると思うけれど、それを見つけた時、胸がざわついた。

「和沙は、和沙だよ。そうだろう」

和臣は、動揺している優介をなだめるように、そう言った。

だが、優介は確かめずにはいられなかった。

「かぐや姫の話を知っていますか。子供のいない夫婦に預けられた赤ん坊が成長したとき、迎えがやってきてその子供は天に帰って行く話です」

優介は、いつも遠くを見ていた和沙の横顔を思い出していた。ここではないどこか、を。こことは違う世界の住人で、いつかはそこに帰ってしまうのではないのか。本人が望まなくても、その時は訪れるのだ。そして、時が来れば何もかも忘れてしまうのだろう。

「和沙はかぐや姫じゃないよ」

和臣は、考え込む優介にそう断言する。

「どうしてそう言い切れるんですか」

いつか和沙はどこかに行ってしまうかもしれないのに。

「和沙は黙っていなくなることはしないと約束した。それだけで充分だろう」

和臣は、うなだれる優介の頭に手を置いて、そっと撫でる。

その手はとても温かくて、けれど、優介は不安を拭えなかった。

和沙を信じていないわけではなかった。でも、自分の意のままになることなんてこの世に存在しないのだと、心のどこかでいつも感じていた。世の中、自分の思い通りに事が運べば、誰もがみんな幸福になれる。でも、現実はそうではないのだ、と。

和臣は、和沙について真実を知らなければならなかった。十五年の間、ずっと和沙を自分の子として育ててきたことに後悔はない。

十五年前の冬。全てはあの夜から始まった。

あの少女が何者なのか、そして和沙と名付けた赤ん坊は何者なのか。今まで目を背けてきた真実に向き合う時が来たのかもしれない。

和臣は如月の家へと向かう車の中、あの夜のことを思い返し震えが走る。

予定よりも早く小旅行から帰宅して、家の様子がおかしいことにすぐに気が付いた。そして、和沙の部屋で、あの惨状を目にした。

流れ出た大量の血。その中に倒れている和沙。そして、それを抱き起こそうとしていた男。最初、その男がやったのだと思った。けれど、誤解はすぐに解けた。その男は如月と名乗り、そして、彼女の使いだと言った。

その男は、和沙は心配いらないと穏やかに言い、そしてしばらく二人にしてくれと頼まれた。

その後、しばらくして部屋から出て来た時には、部屋の中はもう元通りになっていた。そして、怪我をしていたはずの和沙は、何事も無かったかのようにベッドの中で眠っていた。

その場では、気が動転していて如月に何も聞くことができなかった。血溜まりの中で気を失っていた和沙のことが気懸かりだったこともある。そして、何が起きているのか、それを聞こうとしたときには、すでに如月の姿はそこになかった。

和沙が言うには、如月という男は和沙を迎えに来たという。それが本当ならば、和沙を自分たちに託した女のことも知っているはずだった。そして、本人も彼女の使いだと言っていたことを思い返していた。

和臣は、名刺にある住所のアパートの前に立ち、そして、チャイムを押す。

時を置かずにドアが静かに開いた。

彼は和臣の来訪を予期していたのか、何も聞かずに部屋に上げた。

和沙の言ったとおりに何も無い部屋は、如月という男の素性を明らかにしない。如月は自分より若い外見ではあったが、和臣は彼を自分より年下とは思わなかった。

作り物のような整った顔は、まるで仮面のようだった。そして、そこからも何も読み取れないことに一抹の不安を感じつつ、和臣は何から切り出せばいいのか逡巡する。

「和沙について、聞きに来たのだろう」

如月は、迷う和臣の心を見透かすように切り出した。

和臣は、まだ迷っていた。

「和沙という名の少年は、貴方方の子供でもある。彼女が貴方に彼を託したのにも意味はあるのだろう。それで、何が知りたい？」

如月は、何を企んでいるのか、迷う和臣をそそのかすようにそう囁いた。

「これからのこと。和沙を守るにはどうしたらいい」

和沙に何が起こったのかということも勿論気にはなったが、それ以上に、このまま自分たちの元からいなくなってしまうような気がした。

だから、これからのことを尋ねた。

真実を知るためにここまできたのに、どうしても踏み出せない臆病な自分を、和臣は見ないふりをした。

「それは、人の手には余ることだ。だが、和沙が鬼に殺されることはない」

「だからと言って、このままにしてはおけないだろう」

「貴方が為すべきことは、和沙の帰る場所を失くさないこと。願いが叶って、やっと家族になったのだろう。それを大事にすればいい」

「願いが叶った？」

「遠い昔のことだ。そして、彼女にも事情があるということだ」

「和沙を連れて来たあの人は、いったい...」

「貴方は会ったことがあるはずだ。その前世で。その時に今の妻とも、和沙とも共に過ごしたはずだ。その時のことは詳しくは知らぬが、彼女にそう聞いている」

如月は、壁にもたれながら和臣をまっすぐに見た。

「それを思い出せないと、家族ではいられないというものでもあるまい。大事なのは、今の自分がどう生きたいのか。それだけだ」

確かに、何も知らなくても自分たちは家族だということに変わりはない。前世に何を願ったのか知らなくとも、和沙を、妻を愛しく思う心には変わりはない。だが、本当にそれだけでいいのか。和臣の中に疑念の音が響く。

如月は、まっすぐに和臣を見据え、そして、口元を少し皮肉に歪める。

「和沙が普通の人間と違うのは分かっているんだろう。それでも、自分の子供だと思えるのか」

確かに、その実感はない。和沙は自分にとって少しの違和感もなく普通の子供にしか見えなかった。けれど、この先も同じだという保障はどこにもない。

「和沙は彼女のしもべだ。いつか彼女が戻った時、何もかも捨てて、彼女の元に戻るだろう。それでも、ずっと家族だと言えるのか」

「それが、和沙の望みならば、止める権利などないだろうな。それでも、その時までには家族でいてもいいだろう。彼女は、和沙を置いていった時に、幸せにして欲しいと言った。ごく普通の人間としてのささやかな幸せをこの子に与えて欲しいと」

あの時は当たり前のこととして深く考えもしなかったが、彼女の嘆願が今はとても重く感じられた。

「その覚悟があるのなら、これをやろう」

そう言って差し出された手には、銀色の小さな金属製の函が鈍い光を放っていた。

和臣は、躊躇いがちにそれを受け取った。

「その中には、かつての貴方と天女の間に交わされた約束が封じられている。それには、和沙の秘密も入っている。それを思い出したところで貴方に何が出来るというものでもない。だから、それを開けるも開けぬも貴方次第」

和臣は、函をじっと見つめる。この中に、真実が封じられているのだろうか。自分がこれまで息子として育ててきた子供の真実の姿を知っても、今までと変わらないでいられる自信はなかった。だが、それを知らなければこの先、守ることなど出来ないことも分かっていた。

如月は知ったところで何も出来ないと言った。だが、それは違うと思う。和沙を守りたいからこそ、如月はこの函を自分に渡したのだろう。

函は、和臣の手の中で次第に熱を帯びて、その熱が指先から流れ込んでくるような気がした。

不意に熱いものが込み上げてくる。

和臣は、和沙のことを思った。前世の記憶なんて覚えているはずもないのに、なぜこんなにも胸に痛いのか。

函は、和臣の手の中で、脈打つように光を放つ。

そして、和臣は、その函を開けた。

如月は、それから目を逸らした。その記憶を見たくないというように。

そして、和臣の脳裏に、残像のようなビジョンが浮かんだ。

\*\*\*

古代、日本。許されぬ恋。

目まぐるしく流れる残像の中、天人の館に集う人間たちの中に自分はいた。そこに行けば、あの子供に会えると知って、穂積皇子は、会いに行った。

父の死後の後継者争いの中、兄の妻の一人である但馬皇女と恋仲になり、一度は都を追われた自分だった。彼女との恋は何一つ益のない報われぬものでしかなかったが、それでも彼女との関係が続けていた。そんな時に、あの子と出会

った。

あの頃は和沙という名ではなく、風変わりな名を名乗っていた。十ほどの童姿のその子供は、自分を拾ってくれた天女のために一所懸命だった。彼女のために人を殺められるほど、一途に、ただひたすらに彼女を見つめていた。

その子供は、天女の手によって作られた人間だと、後に知った。

その材料は、人の身体。無数の死体を繋ぎ合わせて一つの形に作られた器に宿る魂は、生れ落ちてすぐに殺された赤子たちが寄り集まって出来た思念の塊だった。

禁忌を犯した夫婦の元に生まれたのは異形の赤子ばかりが生まれた。その呪われた異様な姿を目にして、彼らは生まれたばかりの赤子を殺して捨てた。そんなことをしても、彼らの罪が消えるはずもないのに。

幾人も、幾人も。何度も、何度も罪を重ねて、……その結果が、あの子だった。

つまり、鬼だ。

ただ、普通に愛されたかったのだと、その子は泣いた。

それは、人ならば誰もが思う情だった。大それた願いではなかった。

そして、その声は天女のもとへと届いた。

天女のもとで、人として初めてその温もりに触れた子供は、自分が鬼だった頃の記憶を失くしていた。

けれど、幸せな時間は永くは続かなかった。やがて、その忌まわしい記憶を取り戻した子供は、自分を殺して捨てた親に復讐を果たし、そして、自分自身をも殺そうとした。

そして、それを引き止めたのが、自分だった。

天女にその子供を死なせないで欲しいと願った心に偽りはなかった。

その姿は人と変わらず、その心もまた人のものなのに、どうしてその子だけが死なねばならぬのか、苦しまねばならぬのか、分からなかった。

鬼子として殺され捨てられた忌まわしい記憶など要らない。その身体が死人のものを繋ぎ合わせて出来ていようが構わなかった。

そして、穂積皇子は、天女に願った。

月日が流れ、全てが過去となった頃に、天女はあの時のまま何も変わらず、和臣のもとを訪れた。

何も知らぬ赤子のあの子を連れて。

あの子が、自分たちの元に来るまでの永い時間をどんな風に生きてきたのか、和臣は知らない。けれど、あの子と家族となって今まで過ごしてきた時間に偽りは無かった。

和沙と名を付けたのは自分だった。

その小さな手を愛しいと思ったのも真実だった。

そして今、その大切な和沙がああの忌まわしい記憶を思い出そうとしている。

それは、この幸福な夢の終わりを意味していた。

暗い場所。水の匂いが微かにした。

ぼくは、何かに呼ばれたような気がして目が覚めた。

滑らかな岩肌の天井が見えた。

ここはどこだ。

見たことのない場所なのに、なぜか懐かしさを感じる。

薄暗いその岩屋の中で、ぼくはそっと身を起こす。

そこは、周囲の壁も天井と同じように岩でできていた。

それほど広くはなかったけれど、その端の方は闇の中に吞まれていて見えない場所があった。

知らない場所なのに、知っているような気がした。

その暗闇の先から誰かが近付いてくる気配がした。

ぼくは、その人の足音を耳にして嬉しくなった。

御方様…。御方様がいる。

今までのことは全部夢で、ぼくはずっとここにいたのだと思った。

あんなことがあるはずがないのだ。

ぼくの側から御方様がいなくなってしまうなんて、そんなことがあるはずない。

「目が覚めたのね」

御方様の声が聞こえた。

ぼくは必死に喋ろうとした。けれど、ぼくは声の出し方が分からなかった。

言いたいことは山ほどあるのに、それが言葉にならない。

「どうして泣いているの？」

御方様は、ぼくに近付いてきて、ぼくの顔をそっと覗き込む。優しく頬を撫でられて、その指先に雫を乗せる。

「何も覚えていないはずなのに。人は、生まれるときには泣くものだというけれど、お前も同じなのね」

御方様の声は優しく、そして少し悲しそうだった。

もしかしたら、泣いていたのは御方様の方だったのかもしれない。

「名前をあげなくてね」

ぼくは、御方様を見た。長い黒髪を毛先のほうだけ束ね、白い着物を上着のように羽織っていた。

ぼくの名前はもう御方様の下さったはずなのに、どうしてまた同じことを繰り返すのだろう。

それを言いたくても、ぼくは、話す言葉を持っていない。

ただ、御方様を見つめることしかできなかった。

「そうね……」

御方様がぼくの顔を見て、少し首を傾げて考えていた。

ぼくの名前は、……だよ。必死に伝えようとするのに、ぼくの言葉は御方様に届かない。

御方様は、言葉を続けた。

「……、はどうかしら」

その名前が、今のぼくには聞こえなかった。そして、自分が必死に何を訴えようとしていたのかさえ分からなくなる。

。

ぼくの名前は…、…何だった？

ぼくは自分の名前が分からなくなっていた。

「あなたは幸せになって」

御方様の言葉は、ぼくを包み込んでくれる。

「幸せになるのよ」

いやなことは全部忘れてしまえばいい。

御方様が背を向ける。



ぼくから離れていく。

闇の中に、静かに足音もなく消えてしまう。

行かないで……

ぼくは必死に声をだそうとするのに、それができない。

ぼくは、ぼくは…

「待って」

声が出せたと思った瞬間、和沙は目が覚めた。

そこは、鬼に襲われた場所だった。バラバラにされた身体はそのまま、意識はあるのに微塵も動けなかった。

「また酷くやられたものだな」

聞き覚えのある声が出て、和沙はなんだか笑いたくなった。

「来るのが遅いよ」

「思い出さないお前が悪い」

如月は和沙の顔を覗き込みながら、見事なものだなと感心したふうに呟きながら、近くに落ちている和沙の右腕を拾う。

不気味な光景なのに、怖くないのはさっきまで見ていた夢のせいなのかもしれない。すべてが他人事のように、実感のない出来事に思えた。全てを思い出せたわけではないのに、この状況を奇異に感じない程度には記憶が戻っているのかもしれない。

血の匂いが辺りに充満しているのに、今はそれも気にならない。まるで、全ての感覚が麻痺してしまったみたいだった。

「治せる？」

和沙の言葉は、自分の身体のことなのに冷静すぎた。

「少し時間がかかるがな」

如月は、その違和感を意識していながら、それを和沙に教えるつもりはなかった。

「そうなんだ。天人っていても万能じゃないんだな」

「俺は壊すのは得意だが、創ったり治したりするのは苦手なんだ」

「そうなの？」

「ああ。天人っていても元は人間なんだ。得手不得手は誰にでもある」

如月は、そう愚痴りながら辺りに散乱した和沙のパーツを拾い集めていた。それを見ながら和沙は、ぽつりと言う。

「夢を見ていたんだ。御方様がいた」

御方様という呼び名を如月は久しぶりに耳にした。それは、天女、月子のことだった。

「思い出してはいるのだな」

「ずっと側にいたかったのに、ぼくはもう必要じゃなくなったのかな」

「そんなことはないだろう。彼女はお前をととても心配していた。何か事情があったはずだ。そして、お前はそれを知っているはずだ」

「でも、思い出せないんだ。ぼくが人間じゃないのは分かったのに、肝心なところが何も分からない。こんなんだから御方様はいなくなってしまったのかな」

「彼女にも彼女なりの理由があるのだろう」

和沙は、それまで見た夢の断片が一つに繋がっていくのを感じた。何か意味はあるはずなのだ。御方様がいなくなったことと、絶対に関わりがあるはずなのに、まだ何かが足りない。

如月は和沙の身体を拾い終えると、それらを一纏めにしてシートに包み、そして抱え上げた。そして、和沙の首はもう片方の手に抱える。

「治すのに時間が要る。ここでは少し不便だ。俺の家に行く。いいな」

「父さんと母さん。心配してるよな」

「そうだな」

和沙は、父との約束を思い出していた。決して黙っていなければならないこと。それは、優介にも言われた言葉だ。

でも、こんな自分を彼らはまだ認めてくれるのだろうか。子供として、友人として、そこに和沙の場所はあるのだろうか。

「まだ、戻れるかな」

「お前がそう望むのなら、帰れるさ」

そんな和沙の不安を悟ったのか、如月は大丈夫だと言う。

「治すのは苦手だって言ってたじゃないか」

和沙は、説得力のない如月の言葉に反論する。

「これがある」

如月はそう言って、和沙の持っていた青い粒の入った小瓶を見せた。

「これは、彼女の作ったものだ。そして、お前の身体も彼女が作ったものだ。だからこれで治る」

「それって、何？」

万病に効くらしいが、それが何なのか誰も詳しくは知らない。そして、それは如月も同じらしかった。

「天人の丹（てんにんのたん）と彼女は言っていた。人の身体に作用する薬だ。人体を形作るものの根源にある設計図に従って異常な部分を正常なものに戻すらしい。その原理は彼女にしか分からない。だが、お前の身体は他の人間よりもずっと精巧に作られている。自然の営みの中で生まれる命よりずっと緻密に設計され、お前の魂に合うように作られたものだ。そして、彼女の技は他のどの天人のそれよりも優れている」

だから、何も心配はいらない。

「御方様は一人で故郷に帰ってしまったのかもしれない」

和沙は、自分でそう言って、また寂しさを感じた。

「あの女にそんなものがあったとは初耳だ」

それに応える如月の声は、和沙の寂しい心を気づかうように優しくかった。

「月みたいな所だって言っていた。見えているのに届かない所だって」

「謎掛けの好きな女だったとは知らなかったな」

「一緒に連れて行ってくれる約束だったんだけどな」

「そうか」

「うん」

和沙は、如月の腕の中で今までに感じたことのない安心感に包まれ、それを少し疎ましく思った。こんなふうのんびりしている場合ではないはずなのに、うまく考えがまとまらない。

「少し眠れ」

如月にそういわれ、和沙は目を閉じていた。すべてが悪い夢だったみたいに、目が覚めたらきっと元に戻っている。

そう、最後に思った。だが、元に戻るとは、どちらのことをいっているのか、和沙にも分からなかった。

闇は深く、和沙の視界を閉ざしていく。

どこに行くのか、と如月に尋ねる自分の声が遠く聞こえ、それに応える如月の声はひどくくぐもっていて聞き取れなかった。

どこまで行っても闇は終わらなかった。

その中で、和沙の意識は断片的に蘇っては、また閉じる。

闇の中で、ふと目覚めてはまた意識が遠のく。

ゆらゆらとゆりかごに揺られて眠る赤ん坊のように、何度も繰り返し、繰り返し、闇の中で揺れていた。

そんな闇の中に微かに見えたものがあった。

岩壁一面に積み上げられた屍の山。

成人したものも、子供も、老人も、赤子も、男も、女も。ありとあらゆる人間の骸がそこにはあった。

それは、御方様が集めた人の形をした抜け殻だった。そして自分は、それらを使って作られた人間なのだと、和沙は理解した。

それが、気持ち悪いとか、厭だとかいう感情は湧いてこなかった。ずっと昔にそう思ったことがあるような気がしたが、それは些細なことだった。

大切なのは御方様が自分を作ったということであって、それ以外のことはどうでもよかった。

そして和沙は、また、別の夢をみた。

彼女は少し欠けた月を見上げながら、昔話をするみたいにぼくに語りかけていた。

「私の故郷は、あの月のようなところ。見えているのに届かない。そこにあると分かっているのに辿り着けない場所……」

長い黒髪、染めていない生成りの着物、細くしなやかな肩の線。

天女の映像は見るたびに鮮明になり、和沙の心を支配していくようだった。けれど、和沙は、それが厭だとは思わなかった。むしろ、もっと知りたいとさえ思った。

ずっとそばにいた人だったのだと、天女の姿を夢にみるたびに実感した。そして、天女がここにはいないことを寂しく感じる。

「如月さんは」

「ラギ、でいい」

「ラギ？」

「ああ」

「どういう意味？」

「たいした意味はないよ」

「ラギは、人間だった頃のことを覚えている？」

そう尋ねることができたのは、ばらばらだった身体が元の形に落ち着いた頃のことだった。

闇の中で漂っていた意識が目覚めている時間が次第に長くなっていた。聞きたいことは沢山あって、そのどれもが意識を掠めては流れ、消えてしまう中で、和沙は、様々なことを知ったような気がしたが、そのどれもが形にならずに記憶の中からこぼれ落ちてしまう。

「ああ、覚えている」

「どんな人間だったの」

「天人になるような人間は、大抵ろくな生き方をしていない。人の死に深く関わり、死臭がその身に染み付いた人間ばかり、だ。オレも沢山殺した。鬼になるのはオレのような人間に殺された人間が多い。無抵抗に、意味もなく殺され、そして自分の死を理解出来ぬまま鬼になる。そして、人への憎悪に目覚める。妬み、嫉(そね)み、羨(うらや)み、恨み、そして希(こいねが)う」

ラギの言葉は子守唄のようにとりとめもなく、和沙がその意味を理解したと思ったときにはすでに別の話が始まっていた。

「天人は善ではないし、鬼は悪ではない。ものの善悪とは人間たちの間にだけ存在する理(ことわり)だ。人間でなくなったものにそんなものは何の価値も無い」

「なら、どうして天人や鬼はここに存在するの」

人間たちが支配するこの世界で、自分たちの存在は無に等しいのに。

「この世界は人間だけのものではないということだ。オレたちは人間の為存在するものではなく、もっと別のものの為の命だということだ」

「別のものって」

「それは天人だけが知っていればいいことだ」

ラギは、残り少なくなった瓶の中の天人の丹を眺め、出会った頃のままでの少年の面影を残す和沙を見て、父親のような微笑みを見せた。

どこまでも天女を追いかけて、その隣で笑う少年の想いは今も変わらずそこにあることを知り、安堵するとともに不憫にもなる。

自分をこんな身体にしたのは、月子とユエだというのに、二人して不在だというのはおもしろくない。ラギは人間だったころのことを決して忘れないだろう。それなのに、目の前の少年は、何もかも忘れて普通の人間になろうとしていた。

月子が何を思ってこんなことをしたのかは知らないが、大昔の約束を果たすためだけとも思えなかった。

穂積皇子との約束は口実でしかなく、何かもっと切羽詰った理由があるような気がした。そして、その理由をユエは知っているのではないかとラギは思っていた。

彼女が自分の故郷だとか言っていたという月のような場所とはどこなのか。

幻のように実体のないものを追いかけているような気がして、ラギは今さらながら厄介な者たちと知り合ったと苦笑する。

これも全て自分の選んだ道ならば、最期までそれに付き合うのも己の道なのだろう。人間に戻りたいとは思わないが、自分のことを忘れられるのは腹が立つ。

今は眠ってしまった和沙を、如月の手は優しく撫でる。ユエは、天人ではない。だが、自分よりも遥かに長い時を生きていた。

月子と出会ってから、五百年あまりの時を生きてきたラギだったが、それでもユエの半分にも満たないのだ。天人の中には何千、何万という時を生きるものもいるという。魂に終わりはないのか。この世界の行きつく先はどこにあるのか。長く生きていても見えないものは無数にあった。

ラギは、自分と同じ迷いの中にいる少年を慈しむように、その腕に包みこんでいた。それが、生きているからこそその迷いだと知りながら、ラギは待つことしかできない現状に少し苛立つ。が、早く全てを思い出せと和沙に迫りたくなるのをこらえながら、それを楽しんでもいた。

男は、藪を分け入り山の奥へと向かっていた。

和沙を襲い、失敗を繰り返し、殺すことも乗っ取ることも出来ずに、この身体はすでに限界を超えてしまった。二ヶ月余りの間、よく保ったものだと思う。だが、もう、これは不要だ。けれど、その辺りに簡単に捨てられるものでもなかった。だから、初めにこの身体を見つけた場所へ向かっていた。

この身体の持ち主は山の中で首をくくろうとしていた。この男が自殺しようとした理由など自分には関係のないことで、人の形をして動かせるものならば何でも良かった。

死の瞬間が人の身体を奪うもっとも最適な瞬間だった。人の身体と精神は密接に繋がっていて、健康な人間の身体を奪うのはまず不可能だった。だから、こういうふうに自殺をする人間が鬼にとってはもっともとり憑きやすい。だが、あまり長くは使えないのが欠点だった。

太い枝が張り出した一本の木の前に立つ。そこには以前に使ったロープがまだ残っていた。輪になったその先端に首を差し入れる。

自分に人に憑依する術を教えた男の顔をふと思い出す。ただ漂うだけの鬼から、自由に動くことの出来る鬼へ自分は進化した。そして、さらに自由を手にするために、朽ちることのないあの身体が欲しかった。

この身体は、もう使えない。

男の足が宙に浮く。

ゆらゆらと、弧を描き揺れる足先。そして、男は沈黙した。

そこには死後しばらく経った死体がぶら下がっていた。

鬼はその身体をもう振り返ることはなかった。そして、後には木々の間を風が吹き抜ける音だけが静かに流れて消えた。

紗雪は、学校に来なくなった和沙のことが心配だった。そして優介のことも、気がかりだった。優介は和沙がいなくなった頃から、様子がおかしかった。最初は、和沙が学校を休んでいるせいかとも思ったけれど、その他にもなにが悩んでいるような気がして、紗雪でさえ近づけなかった。

和沙が、休んでいる間、紗雪は和沙の家まで何度か行った。けれど、家の前まで来るとそれ以上の勇気が出なくて、引き返す。それなのに、また和沙の家まで来てしまう。

こんなことなら、あの時、優介と一緒に和沙の家に来ていればよかった。一度だけでも訪ねていたら、口実ができたのに、和沙のお見舞いに行くのに、いつまでもきっかけがつかめない。

でも、今日は1学期の終業式だった。学校に行っている間は、和沙が来ていなくても、今日も休んでいるのだと分かったが、休みに入ってしまうと、元気になったのかどうかも分からない。だから、お見舞いに来たという口実も、今日までしか使えない。

そして、紗雪の手には、花かごがあった。これを渡して、様子を聞くだけ。そう思うのに、足が前に進まない。

やっと、玄関先まで来たけれど、今度はチャイムを押せなくて、指が途中で止まった。こんなの、ぜんぜん自分らしくない、そう紗雪は思うのに、手が動かなかった。

そして、やっと押せたのに、ドアが開く前に紗雪は、花かごをそこに残して駆け出していた。

逃げるように紗雪が飛び出してきたその後姿を、優介は見送りながら、紗雪と入れ違いに和沙の家の玄関に立った。その瞬間ドアが開き、美小夜が出てきた。美小夜は弱々しく微笑みながら、優介を迎えてくれた。和沙のことが心配で眠れないのか、少しやつれたように見えた。

優介は、玄関先に置かれた花かごを美小夜に渡しながら、まだ帰らない和沙のことを思った。みんなが和沙のことを心配している。

早く帰ってこいと、願っている。和沙の両親も、紗雪も、そして自分も、待っている。

だけど、あれから一週間も経つ。もしも、帰れないなんて思っているんじゃないかと思うと、このままじゃいけないような気がした。

優介は、もう待つことをやめようと、その時、思った。

和沙が帰ってこないのなら、迎えに行けばいい。如月のところに行っても駄目だろう。和沙が行方不明になって、すぐに和臣が如月のところには行っている。

あと残されているのは、紗雪が持っている鏡だ。

優介は、紗雪の後を追った。彼女を見かけたのはついさっきのことだ。まだ、近くにいるはずだった。

如月なんかには和沙は渡さない。

あの鏡さえ隠してしまえば、和沙はきっと帰ってくる。あの鏡が諸悪の根源なのだと、優介は信じた。

あれさえなければ、和沙はきっと帰ってくる。

優介は、迷いのなくなった目で、紗雪の背後に立ち、彼女に声をかけていた。

和沙が家に戻ったのは、夏休みが始まる前日のことだった。

鬼にバラバラにされた身体は三日ほどで元に戻ったが、どんな顔をして家に戻ればいいのか分からなくて、ずるずると今まで如月の部屋にいた。それまでの間、如月とはたくさん話をしたような気がするけれど、その中身ははっきり言って覚えていなかった。

今回のことで、自分は人間とは違うのだと思い知らされ、これは現実なのだと思頭では認めることは出来ても、そこに生まれる感情までは、ねじ曲げることはできなかった。如月について行けば、どうにかなるのだろうか。もっと昔のことを思い出して、今の自分が消えてしまえば、それですべてが丸く収まるのだろうか。だが、和沙は如月の部屋でのことを思い出して、いやな気分になる。

いつまでも動こうとしない和沙に、如月が昔話を始めた。また、とりとめもない話なのかと思っていたら、それは、如月が人間だった頃の話だった。それは、和沙がユエと呼ばれていた頃の話だった。

御方様とラギが初めて会ったのは、ラギが元服して初陣となった戦場後だった。時は、戦国時代、国は荒れ果て、世は荒みきっていた。どんなに取り繕ったところで、戦なんてものは、殺し合いにすぎない。そんな時代が、人を幸せにしてくれるはずもなく、御方様は、ひどく失望していた。だから、御方様は、戦の後に残された瀕死の負傷者を手当てして歩いていた。

ラギは、初陣の後、昂ったまま、その戦場に戻ってきて、そこで御方様に会った。まるで死者を甦らせているように見えた、ラギは言った。ラギは、その女が生き返らせたばかりの兵士の一人に刃を振るった。目の前で、自分が生き返らせた兵士を殺されたというのに、女は眉一つ動かさず、また別の怪我人の手当てをした。ラギは、兵士が立ち上がるそばから殺していった。

そして、とうとうそこに立っているのが、二人きりになった時、御方様は、やっとラギを見た。

「殺すのは、簡単ね」

そう言われて、ラギはその得体の知れぬ女に初めて恐怖を覚えた、と言った。

「また、甦らせればいだろう」

そう言うラギに、御方様は憐れむでもなく、蔑むでもなく、とても澄んだ目で見返した。

それが、出会いだった。その数年後、別人になりすましてラギのもとにやってきた彼女は、ユエを連れていた。ユエは、ラギの小姓になり、ずっと側に付き従った。

「ユエは、なかなか懐いてくれなくて苦労した」

如月は、そう言いながら、和沙の頬に指を触れた。和沙は、その如月の表情にいやな予感を覚え、身を引くようにあどろさった。けれど、ラギはその分だけ和沙に近寄る。そして、逃げ場を失くした和沙の首に、手をかける。

「オレは、ユエじゃない」

必死に否定する和沙だったが、それ以上逃げることはできなくて、近づいてくるラギの顔を凝視していた。

鼻先が触れ合い、息が唇にかかる。少しでも動いたらシャレにならなくなりそうで、和沙は、がちがちに身を強ばらせた。そして、その体勢に和沙が耐え切れなくなったとき、如月が動いた。

和沙は咄嗟に顔を背け、如月は和沙の耳元に唇を寄せる。耳元で囁かれて、和沙の背筋に悪寒が走った。

それからのことはよく覚えていない。必死に如月を振り払って、そして部屋を飛び出していった。耳元で囁かれた如月の言葉を思い出すたびにうなされそうだった。

そして、我に返ったとき、和沙はやっと家に帰る決心がついた。もう、如月のところにはいられない。そうなったら、和沙には自分の家しか行く当てはなかった。

ギラギラと眩しい太陽に照らされながら辿る家路は遠く、その足取りは一向に進まなかった。西に傾きかけた強い陽射しが、和沙を後押しするように背中をじりじりと灼いた。

このまま消えてしまえばいいのに。そう思ってしまうほど、和沙は憂鬱だった。如月のところにはいられない。けれど、家に戻って、もしも拒絶されたら、自分はどうすればいいのだろう。

和沙は、不安に押しつぶされそうだった。けれど、どんなに遅い歩みでも目的地がある限り、そこに辿り着く。太陽

が西の峰にその姿を隠した頃、和沙は家に着いていた。如月が用意してくれたシャツは汗ばみ、和沙の気分を余計に減入らせる。

ゆっくりと玄関の前に立つ。インターフォンのボタンを押す指は、一瞬躊躇するが、和沙は一息に指に力を込めた。

家の中に響くチャイムの音が聞こえるのと同時に玄関のドアが開く。

「おかえり」

いつもと変わらない母の姿がそこにはあった。一週間ぶりだった。

「ただいま」

和沙は、母につられるようにそう返していた。

「お腹空いてない？」

「うん。大丈夫」

和沙は、あまりにも普段通りの母の言葉に、全身の緊張が解けていくのを感じる。

「心配かけてごめん」

そして、その言葉がごく自然に言えたことが嬉しかった。

「早く中に入りなさい。外は暑かったですよ」

母さんは、他に何も聞かなかった。本当は、聞きたいこと、言いたいことはたくさんあるんだと思う。けれど何も聞かれないことに、和沙はほっとしていた。そして、家の中に入ると、今さらながらここが自分の家なのだと実感する。

父と母と、自分がいて初めて一つの家族になる。誰が欠けてもいけないのだと思う。

家に帰るまではあんなに不安だったのに、今は何を不安に感じていたのかさえ思い出せないほどだった。こんなことなら、もっと早く帰って来るんだった。そんな身勝手なことを考えてしまうほど、和沙は母に甘えていたのかもしれない。

「優介くん、心配して何度も来てくれてたのよ。入れ違いになっちゃったわね。いつもなら、もうしばらくここで待ってたのにね。今日は何か用事があったみたいね。後で電話しときなさいね」

その言葉に、今までのことが全部夢だったような気さえしていた和沙は、ふいに現実に引き戻されたような気がした。

優介のことを忘れていたわけではなかったが、何の連絡も入れないままにしてしまったことを後悔した。

初めから優介には心配をかけてばかりだった。元気な姿だけでも見せておかないといけないだろう。

汗で湿ったシャツを着替えようと自分の部屋に戻ると、和沙はクローゼットの前で少しためらい、そして扉を開けた。

当然だが、何も飛び出しては来なかった。部屋の中は全て元通りに綺麗になり、あの時の名残はどこにも残っていない。それでも記憶は、繰り返し、和沙の頭の中を駆け巡る。

厭な思い出を打ち消すように、和沙は新しいシャツを取り出して手早く着替えた。

階段を駆け下りると母が驚いて飛び出してくると鉢合わせるが、和沙はすぐに戻るから、と言い残して急いで外に飛び出していた。

和沙は、夕暮れの街を走りながら、見慣れたはずの街並みがよそよそしく感じられた。自分は『一条和沙』という人間のふりをして、すべての人間を欺いている鬼なのだから、それも仕方のないことなのかもしれない。

日がすっかり落ちて、まだ辺りは仄かに明るく、犬の散歩させながらのんびりと歩いている老人が、走る和沙を怪訝そうに見送る。

夏の夕暮れ、昼の名残の熱風が吹き抜ける。けれど、そこには微かに夜の匂いが紛れていた。



和沙は、学校の裏庭のヒマラヤ杉の手前で立ち止まる。

夕闇の濃くなった辺りには、昼の名残の熱気を帯びた風が梢を鳴らして吹きぬけていった。

人の気配はなかった。

こんなところに優介がいるなんて、どうして思ったのか、自分でもわからなかった。優介を追って家を飛び出した理由もわからない。優介に会わなくちゃいけないと思ったのは覚えている。早く元気な姿を見せたいとも思った。でも、それは明日でもかまわなかったはずだ。

和沙は、自分自身に得体の知れない違和感を感じながら、何かに急かされるように薄闇の中を進んだ。

そして、木の陰に優介を見つけた。

倒れている優介を……。

薄闇の時間のことを、逢魔が時と呼ぶというが、いくら闇に目が慣れてきていても、目の前にいる人の顔を見分けるのは難しい。それなのにどうして優介の顔だけは見えるのか、和沙には不思議だった。

そして、それに覆い被さる白い人影。その手には銀色の光。刃物のきらめき。

和沙にはその白い影が優介を殺そうとしているようにしか見えなかった。そして、和沙の身体は、考えるよりも早く動いていた。

「やめろっ」

和沙は咄嗟に叫んでいた。

その声に振り向く白い影を見ながら、和沙はその手を掴む。

その影は、紗雪だった。

どうして、彼女が？と疑問が過るが、勢いがついていて止められなかった。

紗雪は和沙を見て何かを言いかけたが、和沙は体勢を崩し、そのまま彼女を押し倒すように、もつれて倒れこんでいた。

それより少し時は遡る。

優介は、紗雪には、和沙が行方不明だとは言ってなかった。体調が悪いと学校には届けていて、和沙がいなくなったことを知っているのは、和沙の両親の他は優介だけだった。

和臣は、和沙がいなくなったあの夜、遅くまで帰ってこなかった。ただひどく疲れた顔をして、何かをこらえているみたいに固く口を閉ざしていた。そんな和臣の手を、おばさんは何も言わずにずっと握っていた。優介は家に帰るタイミングを逃し、そのまま朝まで和沙の帰りを待たけれど、結局和沙は帰らなかった。和沙がどうなったのか詳しいことは聞けずじまいで、でも、和沙はちゃんと戻ってくると、和臣は言った。そして、あれから一週間。和沙はまだ戻らなかった。

何も知らない紗雪が、和沙の家まで来たとき、紗雪がそのまま引き返してくれてよかったと思った。

紗雪にあの鏡のことをもっと詳しく聞くと、後を追った優介だったが、彼女の持つ鏡が本当に和沙の記憶と関係があるのかどうかは分からない。けれど、その話を聞いてからずっと厭な予感は続いていた。

優介が行くことで彼女はまた厭な顔をするだろう。彼女が気を惹きたいのは和沙なのだから。そして、彼女にとって優介は、一番邪魔な存在なのだという事も分かっていた。だが、優介にだって譲れないものはある。

やっと、手に入れた場所なのだ。そう簡単に誰かに譲れるものではない。

そして、紗雪が優介に気が付く。

足音を聞いて、嬉しそうに顔を上げる。そして、それが目当ての人間ではなかったと知ると、その顔はみるみるうちに曇っていく。紗雪が自分を見るときいつもの顔だ。そして、そういう顔をするのは彼女だけではない。皆、そうだ。和沙に対するものと自分に対するものあからさまな違いを、普段なら気付かぬふりをしていられるのに、和沙のいない今は、こんなにも痛い。

夕空がオレンジに染めた天を衝くように真っ直ぐに伸びた大木のその下に、優介と紗雪はいた。

「和沙じゃなくて、ごめん」

優介は、痛みを隠していつものように微笑んだ。

「和沙は、今行方不明なんだ。あれからずっと家に戻っていない」

「ウソ。ホントに？」

「おじさんも、おばさんも和沙は絶対に帰ってくるから大丈夫だって言うけど、それがいつになるのか分からないのに、辛いだろうな」

「心当たりとか、探したの？」

優介は当たり前のことを尋ねる紗雪に少し苛つく。

「この前、和沙がいなくなるかもって言っただろ。ずっと和沙は変な奴に狙われてて、何度も襲われてるみたいなんだ」

その口調から何かを悟ったのか、紗雪は少し怯え、そして、バックからその鏡を取り出していた。

「この鏡のせいなの？」

それは、一見鏡には見えない白い円い板だった。

その白濁した色はプラスチックで出来ているようにも見えた。

「それは分からない。でも、全くの無関係とも言えないと思う」

紗雪は、その鏡を優介に渡していた。

優介は、それを受け取り、そして、その軽さに驚く。まるで何も持っていないようだった。そして、その精緻(せいち)な文様に目をみはる。

その白い板には、蕨のような草木が周囲をぐるりと囲み、その内側に幾何学的な模様が嵌めこまれ、さらにその中に奇妙な生き物の姿が刻まれていた。

古代の銅鏡のような印象を受けるのに、その白い色が全てを否定する。

「何かのレプリカなのかな」

優介は、その文様を食い入るように見つめていた。そして、鏡を裏返す。

何もない平らな面は、やはり何も映さなかった。だが、優介は、その虚無のような白に怖れを抱く。

厭だ。

それは、とても気持ちの悪い鏡だった。

優介には、その存在そのものが怖くて仕方がなかった。

そこに触れた指先から流れ込んでくる感情は恐怖だとか、畏怖だとか、そんな生易しいものではなく、心の底から嫌悪感が込み上げてくるような、そんな気持ちの悪いものだった。

それは、死への恐怖に似ていたのかもしれない。

これ以上、これを持ってはいけない。そう思うのに、手が動かない。そして、気が遠くなる。

こんな気持ち悪いものをどうして彼女は平気で持っていられるのか、優介には不思議だった。

そして、優介が意識を失う直前に見たのは、静かに笑みをたたえる紗雪のくちびるだった。

どすんという鈍い音。そして、胸元に硬い感触。全ては一瞬のうちに起っていた。

和沙は、慌てて身を起こしていた。

紗雪は、じっと和沙を見つめていた。

お互いに何が起こったのか、分かっていなかった。

紗雪は、和沙がいきなり現れて驚くと同時に無性に嬉しかった。行方不明と聞いた時には本当に心配だった。けれど、無事な姿を見られて良かったと心から思う。

怖い顔をした和沙が自分に迫ってくるのを見ながら紗雪は、和沙に向き直る。

やっと来てくれた。ずっと話したかった。会いたかった。そんな感情が先に立って、自分の手にナイフがあることはすっかり忘れていた。

優介に鏡を渡した後、彼は気分が悪そうで、声をかけても返事をしなくなっていた。そして、優介の肩に手をかけたらそのまま倒れてしまった。

突然のことで紗雪はどうしたらいいのか、分からなくなっていた。何かしなくてはと、咄嗟にバックの中に手を入れていた。ごちゃごちゃと雑多なもので一杯になったバックの中は、今の紗雪と同じくらい混乱していた。

携帯で、助けを呼ばなくちゃ、そう思ったとき、硬いものが手に触れた。急いでそれをつかんで取り出すと、それは綺麗な細工のほどこされた小さなナイフだった。

それは、叔父からの海外土産だった。西洋のお姫様が持っていたお守りのようなものだと聞いて、バックに入れておいたのを今の今まで忘れていた。そして、そのナイフを手にしたまま、紗雪は、背後に近付く足音に気が付いた。無意識に両手で祈るようにそのナイフを握り締めていた。そして、振り向く。

「一条くん…」

紗雪は和沙を見た途端、自分の手の中にあるものの存在を忘れていた。飾りの着いた鞆は音もなく抜け、もう片方の手の中に握られていた。

剥き出しの刃が薄闇の中で鈍く光る。

その手を捕まれ、その勢いに負けて紗雪はバランスを崩していた。どうして和沙が怒っているのか、紗雪にはわからなかった。そして、そのままもつれるように地面に倒れこみ、紗雪は胸が苦しくなる。

和沙の重さと不思議な香りに包まれて、紗雪の鼓動が一つ跳ねた気がした。

けれどすぐに和沙の温もりが離れてしまう。

ずっと、和沙の側に行きたかった。何よりも、和沙に自分を見て欲しかったのだ。和沙の視線を独り占めして、他の誰もその中に入らせないようにしたかった。

誰かに嫉妬する自分が、どんな顔をしているのか考えたくなくて、ずっと苦しかった。でも、今、和沙の瞳の中には、紗雪が映っていた。

息がかかるくらい近くに和沙の顔を見て、和沙があ那时的少年そのものように見えた。

紗雪は、鏡の中の少年にもう一度会いたかったのかもしれない。

その願いが今、叶ったのだろうか。

紗雪は不思議に満ち足りた気分だった。

それなのに、まぶたが重い。

ずっとその顔を見ていたのに、なんだかすごく眠い。

和沙に振り向いて欲しくてずっと苦しかったのに、今はもう、そんな感情があったことさえ忘れていた。

もう少し見ていたいの、どうしてこんなに眠いのだろう。そして、紗雪は、最期にもう一度、和沙を瞳に映し、その目を静かに閉じていた。

彼女の胸に広がる赤い染みを、和沙は不思議そうに見ていた。

その中心にあるのは柄だけになった銀色のナイフだった。どうして彼女にそれが刺さっているのか。それが分からない。

和沙は、ただ優介を助けたかっただけだった。

咄嗟に身体が動いて止められなかった。

自分は悪くないのだと、心の中で必死に言い訳している自分がいた。そして、そんな和沙を、紗雪は一心に見つめていた。

和沙は、そんな彼女を呆然と見ていた。

初めて彼女の顔がはっきりと見えた気がした。そして、その瞳の中に狼狽えた自分の顔を見る。

彼女が笑う。口元が微かに動く。けれど、なんと言っているのか聞き取れなかった。

また、彼女の唇が動いた。

『よかった』

そう言っているように見えた。和沙は混乱したまま、彼女を見つめ続けていた。

やがて紗雪は目を閉じた。

うたた寝するように、静かにゆっくり目を閉じていく。

呆然と立ちすくむ和沙は、しばらく動けなかった。

紗雪に何が起こったのか。そして、自分が何をしたのか。止まった思考はその答えを導き出すことはなかった。

薄闇が暗闇に変わる。無音。否、遠くで風の音がした。

永遠ともいえる時が過ぎたような気がした頃、そこに如月が現れた。いつものように、全てが終わり、取り返しの付かなくなったその後で。

実際には、紗雪が目を閉じてからそう何分も経っていなかったと思う。けれど、永遠とも思える時が過ぎ、如月の顔を見た途端、和沙の時は動き始めた。

如月は紗雪の胸に刺さったナイフを見て、流れ出た血を指先でなぞる。

和沙は、その脇に座り込み、如月のすることをただ見ていた。

「オレが殺した」

和沙はぽつりと言った。そして、自分のその言葉で現実に戻る。

そう、僕は人殺しだ。鬼に襲われ続け、その恐怖に負けて無関係の彼女を殺してしまった。彼女が鬼でないことはすぐに分かった。和沙に対して敵意はなく、いつも感じる鬼の異様な気配も感じられなかった。それなのに、自分は、彼女を殺してしまった。

「これは、事故だ。だが、このままにしてもおけないな」

如月が何を言っているのか、和沙は理解できなかった。

「生き返らせることができる、とか？」

和沙は、冗談交じりにそう皮肉る。不老不死の力を持つ天人なら、そんなことも可能なのか。だとしたら、本当に万能だ。

「死んだ人間は生き返らない」

だが、如月は言下にそう言う。

「なんで？ 万能の力を持っているんだろ」

和沙は、自分が理不尽なことを言っていることを自覚しながらも、そう言わずにはいられなかった。自分がバラバラにされたときには、ちゃんと治してくれたじゃないか。そう罵りの言葉が脳裏を過る。けれど、如月はその思考を遮るように言う。

「それは自分自身に対しての力だ。その者が万能でなければ意味はない。己を支配できるのは己でしかないということだ」

「だったら、オレの命と彼女の命を交換して。オレの方ならよかったのに。オレならこんなことで死ぬこともなかったんだ」

鬼に身体をバラバラにされても死なない自分を全て納得してはいなかったが、それでも自分の方にナイフが刺さっていたなら、こんな結末にはならなかったはずだという思いを拭うことができない。

「出来ぬことばかり言う」

如月は、困ったように少し笑い、そして、和沙の頬を撫でる。

「お前にこんな顔をさせるつもりはなかったのだから。うまくいかない」

「なんで、俺じゃないんだ」

和沙は、駄々をこねるように繰り返す。そして、

「オレはここにいてもいいのかな」

と、紗雪の死を眼前にして、何度目かの問いを口にする。

「それが月子の願いだった」

「御方様の？」

そう言われても和沙には信じられなかった。御方様の考えていることはいつも自分には難しすぎて、ただその言葉に従うしかない。

全てを思い出せたわけでもないのに、和沙はごく自然にそう思った。いつも一緒にいた人なのだ。そんなに簡単に忘れてしまえるものではない、ということなのかもしれない。

「さて、この娘をこのままにはおけぬ。少し離れている」

如月は和沙を下がらせると、紗雪の身体に刺さったナイフを引き抜く。すでに事切れている彼女から、もう血は流れ出なかった。

紗雪の胸元には花のような染みが広がっているだけで、眠っているようにしか見えなかった。

その紗雪の胸元に如月が手を翳すと、彼女の上に淡い光が射す。胸に広がる血の痕がゆっくりと消えてゆき、ナイフが刺さって破れていたはずの布地までもが元に戻っていく。そして、光が消えたそこには凶行の痕跡は何も残っていなかった。

「生き返らないって、言ったじゃないか」

和沙は、如月につめよる。

「この中に在るのは俺の使役する鬼だ。彼女の魂ではない」

「鬼？」

和沙を襲ってきたものが鬼なのだと最初に言ったのは如月だった。そして、今紗雪の身体に宿したのも鬼なのだという。自分を襲った鬼と、ここにいる鬼は違うものなのだろうか。

「この子は生き返った訳じゃない。ただ、人体という物質を修復しただけだ。中に宿るものが違ってしまえば生き返るとは言わないだろう。人の魂はとても繊細なものだ。一度肉体を離れてしまえばその全てを取り戻すことは不可能だ」

「でも、彼女を呼び戻すことはできるはず……」

まだ、そんなに時間は経っていない。急げば戻せる。和沙は僅かな希望に縋るように如月を見る。だが、如月は首を振る。

「彼女の魂は既にここにはない」

それは、和沙の納得の出来る説明になっていなかった。人間の魂ってそんなに簡単に消えてしまうものなのか。和沙は、自分が今まで常識として知るものと違いすぎる如月の言葉に不審を抱く。

それに、死者の魂をなだめる為にある数々の儀式はなんだというのだろう。死後の世界などないのだと、如月は暗に言っているみたいで、和沙は落ち着かない気分になる。

「それじゃあ、死から生還したとかいう話は、どうなるの」

臨死体験だとか、幽体離脱だとか、不思議な話はいくらでもある。一度心臓が止まり息を吹き返すという話は、医療が発達した現代では、昔に比べたらずっと多いだろう。たった一瞬でも死んでしまえばもう戻れないなんて、そんな理不尽な話を鵜呑みにすることはできなかった。けれど、如月はそれが真実なのだ続ける。

「全てが元と同じなわけではないはずだ。何かを失くし、そして何かを宿す。その違いが周囲からは分からない者もあるし、自分でもそれに気付かない人間もあるだろう。そして、まったく人が違ってしまったように見える者もある。そして、その中には鬼を宿してしまう人間もいる」

だったら、鬼って一体何なんだ。和沙にはますます分からなくなっていた。

「鬼にも様々なものがある。誰にも属さず孤独の中に人を呪うものもいれば、これのように主を見つけて仕えるものもある。自我はあるからこれはこの鬼の意思だ。そして、お前を襲った鬼にも、それなりの理由があるのだろう」

鬼にもいろいろある。人間のように、それぞれが思考し動くというのなら、鬼と人の違いとは一体なんなのか。和沙はその違いが分からなくなっていた。

「鬼も、人も、天人も、もとは同じものだからな。たいした違いはないだろう。鬼は肉体を失ってから魂が変質してしまったもので、天人は、死よりも以前、生きていたうちに変質したものだから、身体を持っているし、それを自在に使う術を知っている。それだけのことだ」

「それじゃあ、オレは？」

「月子に拾われ器をもらった鬼、だろう？」

「そういう鬼って、他にもいる？」

「人間の身体をゼロから作り上げるなんてことができる者は、そういるものじゃない。お前は特別なんだよ」

そう答えながら如月は、紗雪の顔に手を翳していた。

如月の手の動きに合わせて紗雪の目が見開かれる。何も見ていない、何も映さない目は、ガラス玉のように見えた。けれど、彼女は自分の力で起き上がった。

「この娘はこのまま家に帰る。そして、翌朝には目が覚めないだろう」

和沙には彼女が生き返ったように見えるのに、如月は和沙の淡い期待を打ち消すように、冷たく言い放った。

「お前にもお前の理由があるだろう。それを早く思い出せと言っているんだ」

起き上がった紗雪が、和沙を見た。

和沙には、その彼女の目が自分を批難しているみたいに見えた。

「この子の魂は、消えてしまったわけじゃないんだよ。この身体にはもう戻れないけれど、また別の命として生まれてくるの。人の魂はこの世の至るところに存在していて、見ているよ。そこに自我はないけれど……」

「余計なことは言わなくていい」

「だって、ラギ。これじゃああんまりだ。本当はこうなる前に助けられたのに」

「お前は、もう黙れ」

如月は、使役されながらも基本的に自由な鬼たちに閉口しながら、和沙を抱きしめていた。少年の身体は、まだ線が細く頼りなく、出会った頃を如月に思い出させた。

和沙は、その腕の中で懐かしい香りに包まれ、ふいに涙がこぼれた。

「お前はお前の望むままに生きればいい。だが、それはすべてを分かった上での話だ。人として生きるのが悪いことだとは言わない。ずっと人間に憧れていたのだろう」

如月は最期にそう耳元で囁いて、そして、鬼を宿した紗雪を伴い闇へと消えた。

和沙は、如月を追うこともできず闇の中に取り残され、そして、ひとり泣き続けた。

暗闇は嫌いだ。でも、今は、みじめな姿を隠してくれる。

だから、もう少し、このまま、月が隠れていればいいと、和沙は思った。

如月が立ち去り、暗闇の中に残された和沙は、無力感にうちひがれていた。夢の中で見たあの暗い洞窟の中で、泉の畔で、いつも側にいた人のことを想う。

中途半端な今の自分では、きっとあの場所に戻ることはできないだろう。

自分の手は、人を殺めてしまったのだから。余計に戻れない。何もうまくいかない。誰も傷ついて欲しくないのに、自分のせいで皆が不幸になっていくような気がした。

微かな呻き声が和沙を現実に戻した。

大木の下に優介が倒れているのを、和沙は思い出し慌てた。

優介のことを助けようとしていたのに、紗雪や如月のことでそれどころではなかったというのは言い訳にしかない。

「大丈夫か」

和沙は優介に歩み寄り、ゆっくりとその半身を助け起こす。

「ごめん」

優介にそう言われて和沙は、優介の目を見ることができなかった。自分のせいなのだと思うと、どう言葉を続ければいいのか分からなかった。そして、優介が何も知らないと知って和沙は、少しほっとしていた。如月との会話は不穏すぎて、他人に聞かせられるようなものではない。そして、自分のしたことも、誰にも言えない。

「ちゃんと帰ってきたんだな、よかった」

「ごめん……」

和沙は、何を話したらいいのか分からずうつむいた。

とても静かだった。

優介は、沈んだ様子の和沙に何があったのか気になったが、その前に自分がどうしてこんなところにいるのか、不審に思う。いつものように和沙の家に寄ったことは覚えていた。だが、ここはどこなのか。暗くてよくわからないが、屋外なことは確かだった。

しばらくして闇に慣れてきた目で、ぼんやりと見えてきた景色に、優介の記憶が一気に戻ってきた。

「彼女は、どうしたの？」

優介がそう問うと、和沙はばつが悪そうに眼をそらした。

「彼女は...、藤居さんは、何がしたかったんだろ」

「何も聞いてないのか」

話を聞く前に彼女は死んでしまったなんて、和沙には言えなかった。

再び、視線を逸らしたその先に、和沙は光るものを見つけた。

白くて円い光が誘うように、視界の中心に飛び込んできた。そして、その光に導かれるように、和沙は手を伸ばしていた。

あと少しでそれに触れるというその時に、和沙の手を阻むものがいた。

横から延びる手は優介のものだった。そして、その手は和沙の手首をしっかりと掴む。普段とは違うその力の強さに、和沙は驚くと同時に背筋に冷たいものを感じた。

この感覚には覚えがある。この尋常ではない力は……。

「それは、ダメだよ。和沙」

優介の声が耳元で聞こえた。

「それは、渡さない」

それは、終わりのない悪夢にも似ていた。



和沙の手首を掴む優介の手は冷たく、そして、その光から遠ざけるように和沙の手を引き戻そうとする力は、有無を言わさぬものがあった。

いつから、なのだろう。

和沙は、優介の変化に気付けなかった自分の迂闊さを呪う。ずっと一緒にいたのに、何をやってたのだ。そう責められても仕方のない状況だった。

けれど、それが逆に和沙を駆り立てた。

あの光を手に入れたら、何かが変わる。だから、鬼はこんなにも必死に和沙を引き止めようとしているのだろう。

和沙は異常な力で投げ飛ばされて、背後の木の幹に背を打ち付けられていた。身体中の息が全部吐き出されたような感覚がして、目の前が一瞬真っ白になる。けれど、その次の瞬間、和沙は再びの攻撃を察知して身を翻す。だが、反撃は出来ない。自分が手を出せば優介を殺してしまいそうだからだ。紗雪を殺めてしまった感触が厭な手触りと共に繰り返される。相手が知らない奴だったらこんなに悩まずに済んだだろう。けれど、優介は初めて出来た友達なのだ。傷つけることなんて出来ない。

鬼に操られているのか、それとももう鬼の意識しかないのか。暗い瞳に生气はなく、代わりによどんだ狂気が見え隠れする。

鏡との距離は数メートル。優介のすぐ後ろにそれはある。あれさえあれば鬼を封じることが出来る。根拠のない確信が和沙の中に芽生え、そして、早く、あれを手に入れると急ぎ立てる。だが、和沙はそこから動く事が出来なかった。自分が動けば優介を死なせてしまうかもしれない。そう思うと何も出来ない。

動けずにいる和沙に、鬼も様子を窺うようにふとその動きを止めた。

互いに距離を置き、向かい合う。

その間を風が音も無く吹き抜けた。

優介は、束の間正気に戻り、真っ直ぐに、そして何かを訴えるように和沙を見る。だが、次の瞬間その光は消え、別の何かに摩り替わる。

「お前は、何者なんだ」

そう問うたのは優介の中の鬼だった。

和沙は、その問いに答えられなかった。

「あと少しでこの身体を手に入れられるというところでお前は現れた。ここまではするのに一体どれだけの時を費やしたと思う？ あと一押しだったというのに、お前は全てを台無しにした」

生かさず殺さずこの少年を虜にして、この器を自由に出来るところまでゆっくりと時間をかけて、細心の注意を払ってきたというのに、あの一瞬で全てが水泡に帰した。

鬼は、憎々しげに和沙を見る。

和沙という存在に優介は救いを見つけてしまった。脆くなっていたはずの精神は、よりどころを得てその力を取り戻してしまった。おかげでまた一からやり直した。

「お前を殺してやろうと何度思っただろう。だが、この器はこれからの為のものだ。そんなことでこの手を汚すことはできなかった。そして、やっと使える身体を手に入れたというのに、今度はあの男が邪魔をする」

鬼は苛立ちながら、これまでの失敗の数々を思い起こす。あの男は、人ではないモノだ。天人と呼ばれる不老不死の化け物だと、気がついたのはあの場から逃げ出した後だった。

そう、最初の襲撃は、その天人、ラギに依って阻止されてしまった。

そして、二度目。鬼は、天人に守られる和沙の正体を探るために器から離れてやってきた。

「どれだけ痛めつけても死なないお前は、鬼なのだろう。それも特別な」

「その器は天人がお前に与えたものなのだろう」

「どうしてお前がそれを持つのか」

「何故、それが自分ではないのか」

いくつもの鬼の声は、重なり合い不協和音をたてる。和沙には、鬼がなにを言っているのか聞き取ることができなかった。

鬼は、目の前の少年の中身の鬼を追って代わりに自分の中に入ることができれば、もう苦しむことはなくなるような気がした。

そして、三度目の襲撃。

お前からその器を奪ってやろうとしたのに、どこにも入り込める隙間は見つからなかった。

「自分のものにならぬのなら壊れてしまえばいいと、お前をばらばらにしたのに、何故、お前はまだここにいる？」

和沙は、優介の姿でそれを問う鬼に、何も言えなかった。その言葉はまるで優介から投げかけられたみたいに、鋭く胸に突き刺さる。

人間じゃないのに人間の振りをして皆を騙し、何の為にここにいるのか。鬼は鬼らしく闇の中にいればいいのだ。そんな自虐的な言葉が和沙の脳裏を掠める。

それを言ったのが優介以外の他の誰かなら、こんなに傷つかなかったのかもしれない。優介は、和沙にとって、顔の見えない人の群れの中で見つけた一筋の光にも似た存在だった。それは、鬼のせいで人の輪の中に入れなかった優介の、和沙に対する思いに似ているのかもしれない。

そして鬼は、和沙に向かって来た。何もかも捨て去った絶望の表情は、自分が何を望んでいたのか分からずに混乱する幼子のようにも見えた。

それは、今の自分とどこが違うのだろう。鬼に対する同情は、和沙を躊躇させた。だが、ここで自分は終わるわけにはいかない。

和沙は向かってくる鬼の伸ばした手をかわし、立ち位置を入れ替える。そして、自分のその後ろにある光に意識を集中させていた。

見えなくともその気配でその存在は感じる事が出来た。鬼に一瞬でも隙が出来れば光は自分の手の中に戻るだろう。だが、鬼も簡単には和沙の思い通りに動いてはくれなかった。

向かい合う二人の間をひんやりとした夜気を含む風が吹き抜けていった。

ヒマラヤ杉の大きく張り出した枝がざわりと音を立てる。そして、何かが落ちる音がした。それは、一瞬よりも短い刹那の時。

和沙は気を逸らした鬼のその隙を逃さずに身体を反転させる。その光はもう和沙の目の前にあった。

あと少し、という所で、後ろから伸びてきた優介の手が和沙の首にかかった。そのまま地面に倒れこみ、そして、光に向かって伸ばした和沙の手を優介は引き戻そうとしていた。

和沙は、あと数センチの抵抗をする。そして、その白い光を間近に見る。それは、円形の鏡だった。その面(おもて)から溢れる光は、和沙を求めるように強く輝き、指先に踊るように触れる。

ここにおいでと、誘うように指先に纏わり付くその光は、何故か温かかった。

和沙はそれを呼んだ。歌うように脈打つ光に、ここに来いと心の中で強く念じると、光を纏った鏡は、やっと巡りあえた自分の現身をその面に映し出す。

和沙の手の中にすっぽりと収まる鏡は、和沙がその持ち主なのだと分かっているように最期に強く光を放つと、鬼は、その光に怯えるように和沙の上から逃げ出した。

和沙は、鏡を手にしてゆっくりと立ち上がる。

色素の薄かった和沙の髪の色が黒く染まる。そして、青みを帯びた黒い瞳は、深く憂いを宿していた。

和沙は、全てを思い出していた。

自分の存在理由。欠けていた心。無くした記憶。自分自身の運命さえも、全てがあるべき場所にその形を顕わにしていくのを感じた。如月が教えてくれなかった真実が、そこにはあった。

## # 2

---

鬼は、和沙のその姿に嫉妬しながら、それでも救いを求めて手を延ばした。

優介の中で、葛藤するその鬼の姿が愛しくて、和沙は微笑む。その和沙の顔に、それまで渦巻いていた悪意が動きを止めるのが分かった。表情一つで、まるで別人のように見え、鬼はたじろぐ。

一瞬の静寂。

優介の中で暴れていた鬼の感情が一斉に和沙に向けられるのを感じた。そして、ざわめくものの声が絶叫した。。

嵐のように激しく、怒涛の如く押し寄せる無数の声に、優介は耳を塞ぐ。だが、その声は耳を塞いでも無意味だった。内側から響くそれを止める術などなく、優介は痛みを蹂躪される。

「今まで、ごめん」

音の洪水の中で和沙の声がそう明瞭に聞こえた。それは、鬼が聞いた声だったのかもしれないと優介は思った。

気付けなくて、その声が聞こえなくて。ずっと訴えていたのに。そう心に直接流れ込む意識があった。

「もう、いいよ」

ここで眠ればいい。

優介の中で苦しみもがく鬼に、和沙が微笑む。優介は、その光の前で無力だった。

行ってしまうのか。

ただ、そう思った。

寂しいと、思った。そして、本当の絶望の意味を知った。

もう、終わりだ。

その感情が誰のものなのか、優介は、また分からなくなる。

やっと終わる。そう感じたのも確かだった。

これで、終わる。もう終わる。何度もそう繰り返すことでやっと腑に落ちるものがあった。

優介を透かして見える鬼は、ようやく得た安寧の時に抗うように一声叫ぶ。そして、最期にその名を呼ぶ。

「おぼろ…さま…」

その名を聞いて、和沙は怪訝に眉をひそめた。

それは、全てのものの始まりを知る天人の名だった。

御方様に不死を与え、その運命を狂わせた張本人だ。そして、今の御方様の不在もおぼろのせいなのかもしれないと考えると全てが腑に落ちる。

けれど、今の自分にできることは何もない。

目の前にいる鬼を滅すこと以外は。

『やっと死ねる』

安堵にも似たその感情が、心の奥にすんと落ちた。それは鬼の最期の祈りだった。そして、辺りは静寂を取り戻した。

すべてが終わった時、和沙の目から、大粒の涙が一つ頬を伝う。

闇は優しく辺りを包んでいた。静かに、穏やかに、いつものように身近にあった。手の中の鏡は今はただの白い板に戻っていた。

和沙は、欠けていた記憶を取り戻したことを静かに受け止めていた。そして、巻き込んでしまった優介を見る。

優介は、何もかもが終わってしまったというように虚ろな顔で、真っ暗な空を見ていた。

鬼にとって人を殺すのは悪ではなく、人にとって鬼に操られることは悪とは言えない。けれど、どちらもそれで幸福になることはなくて、ただ哀しみばかりが塵のように積もっていただけだった。優介は何も悪くはなかった。優介に憑依していた鬼でさえ悪くないと、和沙は知っていた。如月が鬼にとって善悪は無意味だと言っていたのを思い出す。けれど、それはやっぱり悪いことなのかもしれない。

けれど和沙は、これ以上大切なものを失いたくなかった。

哀しいばかりの存在だって、幸せを望んだっていいじゃないかとも思う。

「この前、優介だけが特別に見えるって言っただろう。あの意味、やっと分かったんだ」

和沙は、優介を救えるだろうか、躊躇いがちに言葉を選ぶ。

「優介にはずっと鬼が取り憑いていたんだ。人間の中には、時々、自分の魂以外の別の魂を宿せる場を持っている人がいるんだ。巫女とか、依巫(よりまし)とか呼ばれる人だ。神がかりとか霊媒とかとも言う。そして、その隙間には鬼も入れる。本人にその自覚はなくても、鬼はその中で身を潜めてその身体を奪う機会を伺っている。その身体の支配者は、元の人間の自我で、それがあろうちは、鬼はそこにも自由にその身体を使えない。鬼がいつから優介の中にいたのかは分からないけれど、優介が特別だったのはそのせいだと思う。その体質のせいで周囲の人間から弾かれることになったんだと思う。みんな、優介の中の鬼に過剰な反応をしていたんだ」

「どうして、そう言い切れるんだ？」

そう問かける優介に、和沙は真実を告げる覚悟をした。

「オレも、鬼だから」

和沙は、優介から目を逸らす。そして、優介は和沙から目を逸らすことが出来なかった。不老不死だというのは如月との会話で優介にはわかっていたかもしれないが、和沙が鬼だということは、知らないはずだった。できれば、誰にも知られたくはなかった。でも、鬼に憑依されかかった優介には、言わないといけない気がした。

「オレは、鬼だったんだ。でも、こんなオレを拾ってくれた人がいた。その人が、身体を持たない俺に自由に動ける身体をくれた。そして、側に置いてくれた。オレはその人がとても好きで、自分が鬼だったことも忘れるくらいに、好きだったんだ」

和沙はそう言いながら、胸に針を刺すような痛みを感じた。

自分は、親に殺された赤ん坊だった。それもひとつではなく、何人もの魂が寄り集まって生まれた鬼だった。自分を殺して捨てた親のそばで、どこにも行けずに迷っていた。そして、年老いた親たちが死を迎えようとしている時に、御方様が現れた。

とてもきれいな人で、鬼は必死に親の命乞いをしていた。自分を殺した憎いはずの親を、なぜ助けるのかと、御方様は訊ねた。鬼がなんと答えたのか、和沙には分からなかった。ただ、厭だと繰り返していたような気がする。そして、御方様は、鬼の願いを叶えてくれた。老夫婦に命を与え、そして鬼には新しい器をくれた。住む場所も、生きる糧も、全部くれた。今度は、家族で暮らせるようにと、鬼にはとても美しい童の身体を。それが、ユエだった。

けれど、偽りの家族はすぐに破綻した。翁が、御方様を裏切ったのだ。それをユエは許せなかった。だから、自分の手で終わらせた。その後、なぜ自分が生きているのか分からなかった。穂積皇子さまが、御方様に願ってくれたのを知ったのは、ずいぶんと後になってからだった。

鬼は、悲しみの塊だった。憐れまれる魂は、卑屈になり、人を恨み、人を憎んだ。そして、それと同じくらい人に憧れた。

胸の奥が、また、軋むような音を立てて、締め付けられるように痛んだ。

借り物でしかないのに、もうこんなに同化してしまっているのかと思うと悲しくなる。和沙の記憶が、今の自分の核となっていることが寂しい。昔とは違うのだと思い知らされているようで、そして、御方様に会いたいと前よりずっと強く願う。そして、同じくらいに父と母に会いたくなる。

けれど、和沙はそんな感傷を隠して、ゆっくりと顔を上げ優介を見た。

「そういうのを、仏教では夜叉って言うんだ。鬼だったものが改心して主に仕え、主のために生きる。その為に他の誰かを傷つけることもあるし、時には死なせてしまうこともある。オレはそうやって沢山の人の死に関わってきた」

「和沙は、和沙だろ」

それは、和臣が優介に言った言葉だった。今度は、優介が和沙に告げるべき言葉だった。

「でも、オレは鬼なんだ」

目を伏せてそう続ける和沙の声が、悲痛に響き、二人の間に重い沈黙が流れた。そして、しばらくして和沙がぼつりと呟いた。

「鬼がいくら人間の振りをしてみても、人間になれるわけじゃないのにな」

それは、懺悔だったのだろうか。

どうして和沙がそんな顔をしなければならないのか、優介には分からなかった。そして、目の前にいる和沙が別人のように見えて苦しかった。

自分の知っている和沙という人間は、もういないと言われているようで、優介には、記憶を取り戻した和沙が、そのまま消えてしまいそうに見えた。

「どこへも行かないよな」

優介は、黙っていることが出来なかった。黙っていたらそれを認めることになってしまいそうで、怖かったのかもしれない。

けれど、次に優介を見る和沙の瞳にはもう弱々しい光はどこにもなかった。

「オレはここにいたい」

優介は、それが和沙の出した答えなのだと思って、不意に身体から力が抜けた。ここにいたいと言う和沙のその言葉に、偽りはないように優介には聞こえた。

「いてもいいかな？」

優介は和沙の真意がどこにあるのかは分からなかった。けれど、結局の所、和沙が何者でも構わなかった。

ずっとそこにいてくれたら、それでいい。だから、その問いに対する優介の答えはとっくに出ていた。

帰り道。暗い足元。街灯の光は道に届かないほど弱々しく、いつもの町並みは深い闇の中に沈んでいた。

和沙は、優介と並んで歩きながら、はらりと落ちてきた前髪の色を見て溜息を吐く。

「これって、戻らないかなあ」

そう言って、色が変わってしまった髪をくしゃくしゃにしていた。

「でも、似合ってるよ」

優介は、黒髪のと和沙に違和感を覚えないわけではなかったが、こうして隣をまた歩けることに安堵していた。本当は、髪の色以外にも元とは微妙に違って見えるのだが、あえてそのことには触れないことにした。

「でもさあ、せっかく茶髪だったのに」

「じゃあ、染めれば？」

「なんか、それも厭だ」

和沙の複雑な心境を聞きながら、やっぱり和沙は和沙のままだと、優介は思った。自分の中に巣くっていた鬼が消えても、優介が優介のままのように、たぶん、和沙も何もかわらないのだと思った。

「あの鏡は、何？」

「オレにも本当のところは分からないけど、形を持たない鬼みたいなものの仮宿みたいなもの、かな」

和沙は、手の中にすっぽりと収まったその鏡に目を落とす。

「全部、思い出したんだな」

「そうなのかな。自分じゃよく分からないんだ。何を忘れていて何を覚えているかなんて、本当にこれが全部だったのかなんて、今のオレには分からないし……」

不安げな顔をする優介に、和沙はあまりそのことに触れたくないのか、あんまり気にするなと笑ってみせた。

「藤居さんがどうしてあの鏡を持っていたのか、は？」

「本当は別の人のものだったはずなだけだね。どうして彼女の手元に渡ったのか、それは分からない。けど……」

和沙は、何かを憂うように言葉を濁していた。

「おぼろ、って、だれ？」

「不老不死の天人」

「如月っていう人とは違う？」

「うん」

「天人て、そんなにたくさんいるのか」

「全部で何人いるかなんて、数えたことないから」

「和沙の好きな人って、その人？」

「全然違うよ。断じて違うから。そんな怖いこと言うなよな」

心底嫌そうな顔をする和沙は、全身でそれを拒絶していた。

「怖い？」

和沙がそこまで拒絶する天人とはいったい……。

「おぼろの話はなし。もし話してて本当に現れたら、オレ、逃げるから」

優介に取り憑いていた鬼に、人の身体を奪う方法を教えたらしい天人は、和沙、というよりもユエの天敵らしかった。和沙は、ただ、危険だと本能的に分かるだけで、詳しいことは何も思い出せない。

御方様もないのに。それに如月だって、なんか前と全然変わってないし、頭を抱えたくなるようなことばかりで、和沙は泣きたくなくなる。

けれど、優介と並んで歩きながら、他愛のない話がまた出来ることにほっとしていた。

以前とは違う。けれど、何も変わらないものもあるのだと、そう思えたのは優介のおかげだった。この先、ずっと一緒にはいられないことは分かっていた。でも、別れの時がおとずれるその時まで、もう少しの間、一条和沙という人間のままでいたかった。

優介を家まで送り、和沙が自分の家に帰ると、父さんと母さんが揃って迎えてくれた。

父さんは、和沙の姿を見て一瞬驚き、そして懐かしそうに目を細めた。

母さんはつい数時間前とは別人のようになってしまった和沙を見て、髪を染めに行っていたのかと詰め寄った。染めるのならひとこと、言ってくればいいのに、と軽く小言を言いながら、それでも家族が揃ったことを喜んだ。

そして、和沙は改めて思う。ここが自分の家なのだ。

帰る場所のある幸福。迷子になった子供が新たに得た場所は、とても温かく、優しさに溢れていることを、和沙は感謝した。

会いたい人は、ここにはいない。大切だった人は側にいない。それは、身の切られるような痛みを胸の奥に疼かせ、矛盾した感情が渦を巻いていた。御方様をすぐにでも探しに行きたくて駆け出したい衝動と、家族や友人に囲まれてずっとここにいたいという思いとが、和沙の身の内で渦巻いていた。

それは、自分の中に戻った記憶のせいなのか。

雲に隠れていた月が顔を出すと、和沙はほっとする。

ずっと一緒だと約束した人。一番大切な人がいた。

御方様がない寂しさと、人の温もりの優しさの中に、帰る場所のある喜びと。

大切なものは一つだけではなく、ここにもあるのだと皆が教えてくれた。

それは、ユエが初めて知った人間の温もりだった。

## 結び

---

夏休みの終わり。和沙は、夜の闇を当てもなく彷徨っていた。伸ばし始めた髪が耳の横で風に撫でられて、さらりと音を立てた。

明日から学校が始まる。

和沙は、紗雪のことを思い出すたびに胸の奥が少し痛んだ。

紗雪が生きていた時の顔が思い出せない。いつも側にいたはずなのに、彼女がどんな顔をして笑っていたのか、何も思い出せないことが苦しかった。

和沙の脳裏に浮かぶのは、紗雪が最期に見せた微笑だけだった。

幸せそうに笑うその顔が、和沙をいつまでも責めているようにも思えた。

藤居紗雪の葬儀は、晴れ渡った夏空の下、秘かに営まれた。

あの日、紗雪は何事もなかったかのように帰宅して、いつものように自室のベッドに入ったのだという。そして、その翌朝、彼女はそのま目が覚めることはなかった。原因不明の死だった。どこにも外傷はなく、毒物の形跡もなかった。解剖されたという話も聞いたけれど、結局は原因不明の突然死とされて事件にはならなかったらしい。

死は誰にでも理不尽なものである。けれど、紗雪の身に降りかかったそれは、あまりにも唐突で、やるせなさばかりがつのる。

葬儀の参列者は多くはなかった。

和沙は、優介と共に彼女の葬儀を遠くから見ていた。

心配していた髪の色は翌朝には元に戻っていた。目立つその髪の色を今は隠すように、キャップを目深に被っていた。葬儀に参列できるような服装ではなかったし、初めから自分がその場に入れる資格などないことも知っていた。彼女の両親に会って、何と言えればいいのかも分からなかったし、自分のせいなのだと告白したところで、その悲しみが癒えるはずもなかった。

ただ、彼女を乗せた霊柩車が立ち去るのをずっと見ていた。そして、その時、やっと彼女が死んだのだと腑に落ちて、せつなさが込み上げてきた。

晴れ渡った空には雲一つなく、溢れる涙を隠してくれる雨もなかった。ただ、五月蠅いくらいに蝉の声がした。泣けなかったのはそのせいなのかもしれない。

和沙は、ただ無言で、彼女の死を悼んだ。

和沙は、紗雪のことを思い出しながら、手の中にある鏡を見る。

「君は優しいな、和沙」

その声は鏡の中からした。

「女々しいだけだよ」

和沙は、こうして何度もユエと語っていた。和沙は、ユエの生まれ変わりでないことを知ったのは、家に戻ってすぐのことだった。

ユエと和沙は同じ記憶を共有しながら、別の人格を持っていた。それぞれが同じ魂をもつ一部だった。どちらが上でも下でもない。ユエは鏡を依り代としていて、和沙は天女の作った人間の身体の中にいた。

だから、ユエと話すのは、自問自答に似ていた。

御方様が和沙を作った理由も、おぼろげには分かってきた。

和沙は、こうしてユエと話すことに慣れてきて、鬼という存在の不思議さを思う。

一つでありながら一つではない。別々の思考をしながら、もう一方のことも理解している。一人の人間の中にいくつもの人格を持っている人はいる。多重人格といわれる人たちのことだ。でも、自分はそれとは違う。

「人と鬼は、やっぱり違うの？」

「君と僕では、やっぱり違うと思う」

「オレは、このまま人間として一生を終えると思う？」

「さあ？ でも、それは御方様の願いだから。和沙が別の道を行きたいと望むなら、それでいいんじゃないか」

風が、頬を撫でて通り過ぎていった。夜は更け、月が中空に昇る。



月は、今夜も遠い。手を伸ばせば届きそうなのに、それに触れることは叶わない。

どこまで走れば月に辿り着けるのだろう。

和沙は答えのない問いを繰り返す。

月は今夜も変わらずにそこにいた。和沙の心を測るように、届かないその場所でずっと見下ろしていた。

とても遠い。届かないくらいに遠いそこから、御方様の声が聞こえるような気がした。

それに重なるように記憶の中に、はっきりと自分の名を呼ぶ声がした。

「ゆえという名は、どうかしら」

仄暗い岩窟の中で、御方様の声が凜と響く。そこは自分の生まれた場所だった。

「私と同じ、月の名前よ」

名も無い鬼を、そう名付けて自分の側に置いてくれた人は、この世の穢れなど何一つ知らぬように清雅に笑う。

和沙は、天を仰ぐ。

伸ばした手の先、届きそうで届かない月は、今夜もとても遠かった……。

夜叉のあしおと... 完

夜叉のあしおと...

<http://p.booklog.jp/book/17419>

著者：荻塑做沙 ogisosasa

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ogisosasa/profile>

発行所：ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17419>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17419>